

八幡町史資料 第二集

八幡のむらのおいたち

愛知県知多郡知多町



序

今回、編纂事業をすすめている八幡町史の資料第二集として、「八幡のむらのおいたち」を刊行することになりました。さきに資料第一集として「近世庶民資料目録」を刊行してより、ほぼ一年の月日が流れましたが、その間に八幡町は隣接の旭・岡田の両町と合併いたし、昭和三十年四月一日より知多町として新発足しております。

ふりかえつてみれば近世の寺本四ヶ村をあわせ八幡と、古見・朝倉の両村にわかれていた新知、さらに谷の奥にひらかれた佐布里の三ヶ村が、八幡村として統合したのは明治三十九年四月のことでありまして、この度の発展的再編成にあたり無量の感激を如何ともできないのであります。

もちろん町史編纂事業は合併後も継続いたし、その大成を期しております。「八幡のむらのおいたち」はその原始・古代の資料をまとめたものであり、編纂委員による野崎・獅子懸・西屋敷の各遺跡の調査発掘とともに、かねて有志の方の所蔵しておられた資料を総括して、伝来の八幡町史の上に鋭意な一頁を書き加えることをえました。

すなわち縄文文化や古墳文化の時代に西屋敷貝塚や梅古墳などの輝かしい遺跡をのこしている新知の地域、そして寺本の地域はこの地方の弥生文化発祥期にあたり野崎・獅子懸の両遺跡で代表されております。さらに佐布里から八幡新田につづく丘陵の上に古代末期より中世の初めにおよぶ古窯址が群をなしてみとめられました。

今これらの遺跡にたつてみます時、烈日の炎天下に自然の沼地をもとめて稲をつくっている農夫たちや、身を切る鈴鹿おろしの中で漁撈をつづける漁夫のおもかげなど、二千年・三千年の古代が幻想となつてうかんでまいりまして、八幡の土地を墳墓の地として定め、営営として今日をさすいてきた先祖の尊い姿に思わず頭がさがつてくるのであります。八幡町史編纂会が事業をすすめるにあたり真摯な精進をつづけていただいている編纂委員各位の熱意の程はもちろん協力いただいている関係者各位の厚意にたいし、感謝の情にたえないのであります。いま町史編纂の中間報告資料として「八幡のむらのおいたち」一編を世におくるにあたり、所感をのべて御批正をこう次第であります。

昭和三十一年三月二十八日

知多町議会議長
八幡町史編纂会長

伊 藤 象 三

序

大東亞戦争の原因と敗因の一つに「神風と大和魂にたよりすぎたこと」があげられている。それはわが国の歴史があまり神がかり的に教えこまれてきた結果による。民族の自尊心として大和魂を意識することは決して悪いことではない。しかしその自信をうらづけるには、客観的にみて誰もが納得できる科学的根拠がなくはならない。科学的根拠とは単に物質的な面だけのことではない。科学的に証明された真実の歴史こそ日本人の精神的バックボーンになるのであり、それがあつてこそ心の底から国を愛する気持も湧いてくるのである。

このような真実の歴史を探るには考古学的研究を出発点としなければならない。しかしこの場合の考古学的研究とは単に土器や石器の分類だけに終始してよいものではない——勿論それは考古学の基礎的研究過程ではあるが——。

それぞれの石器や土器を使用した人達の生活や、その社会の仕組みを科学的に説明しようとする限り、真実の歴史を求めるための考古学とはなりえないからである。

杉崎氏が多忙な教員生活をつづけながら、しかも考古学的研究を志しているにもかかわらず、愛知県教育委員会派遣の教科研究生として私達の地理学教室に足しげく通われたのも、ひたすら古代の生活の実態を追求してやまない、換言すれば真実の歴史を探るための考古学研究者としての意欲のあらわれであつた。生活舞台としての自然が、古代人の生活にとつていかに重要な役割をもつていたかはいまさらいうまでもない。しかるにせまい専門分野にとちこもつてしまつた古い型の学者には、ともするとこういうた他の学科の仕事を見下してしまふきらいがあつた。それではいつの時代においても総合的であるべき人間生活・社会の仕組みを正しく知ることは困難である。そのような学問的不満と良心とが、同氏をして私達の研究室の扉を勇敢にも——これは大げさな表現ではない、自分の専門外の研究室を訪れて初歩から学ぼうとすることは、すでに社会人である場合なかなかの勇氣と熱意がある——ノックさせたのである。

いまその実の一つが熟し、収穫の時期に入った。平野の発達過程をつぶさに述べ、縄文文化から弥生文化への移行をダイナミックにとらえていることは、決して一朝一夕の思いつきではない。氏と共に何度か野外の調査に出た私には、氏が平野地形について記載しなければならなかつた必然性がわかり、そのことから、縄文と弥生とつなぐ生活上のきずなの一面も求められたと思つてゐる。

こうして築きあげられた考古学的成果は、歴史時代の研究に対しても基礎的な役割をはたし得ると思ふ。かくして八幡町史編纂の第一歩は正確に踏みだされたと信じてゐる。

またかかる考古学的成果は郷土のさまざまな学問研究に応用面をもつてゐる。例えば知多半島では地盤の沈下が継続的にあるか否かが重要な問題になつてゐるが、杉崎氏が調査された八幡・横須賀町の海岸砂堆には、約二千年以前の遺跡が瞭然と残つてゐる。これは知多半島の平野がそうやたらに沈下しないことを物語る何よりの証拠である。

なお、杉崎氏はいたつて平易な文章でこの報告書を書いたが、その背後には長い年月と寸暇を惜んで集められた多くの資料があることを忘れてはならない。それにもかかわらず、あえてこのような平易な文章で書かれたのは、かかる学問的研究を数少ない学者の間の問題にとどめるのではなく、一人でも多くの人達に自分たちの郷土の歴史や自然、いや日本の歴史の真実の姿を知つてもらいたいとする教育者としての熱意のあらわれであることを附記しておきたい。

昭和三十一年三月二十四日

名古屋大学地理学研究室にて

井 関 弘 太 郎

例言

一、本書は愛知県知多郡八幡町の町史資料として編纂したものである。

一、本書の第二章第二節・第三節・第四節は、八幡町史編纂会がおこなつた野崎遺跡・獅子懸遺跡・下内橋遺跡の、それぞれ調査概報をなすものである。

一、八幡町は昭和三十年四月一日より旭・岡田の両町と合併し、現在は知多町と称している。旧来、八幡町大字八幡・新知・佐布里といつていた各大字は、それぞれ知多町八幡・新知・佐布里とあらためられた。

本書の記述にあたり、八幡という地名は旧町、旧大字とその意味する地域の範圍をあまりやすすいので、ここでは旧町すなわち八幡地区の区域を考へるときにかきつてこれをつかい、旧大字八幡をいうときには、近世の村名であつた寺本をつかうことにした。

一、八幡町史編纂会のおこなつた事業のうち、昭和三十一年三月より発掘調査している新知の西屋敷貝塚については、調査の進行上より資料の整理がおわつていないので、その報告を本書にのせることができなかった。八幡の古利である薬王山法海寺や、佐布里・八幡新田の丘陵に分布する古窯群の報告とともに、次の機会に詳細な報告をいたしたい。

一、本稿の執筆は、町史編纂委員会の原史古代部を担当した委員の杉崎章があつたものである。

図版

第一 野崎遺跡・獅子懸遺跡出土遺物

第二 野崎遺跡・獅子懸遺跡調査状況

第三 堀之内・伝兵衛山よりの展望

八幡のむらのおいたち

序	伊藤象三
序	井関弘太郎

第一章 八幡の土地のなりたち

一、丘陵の地質	一
二、侵蝕谷の成立	二
三、海侵と海退	三
四、砂堆列の形成	四
五、自然の低湿地	五

第二章 八幡のむらのあけぼの

一、遺跡の分布	七
二、野崎遺跡	一〇
三、獅子懸遺跡	二〇
四、下内橋遺跡	二七

第三章 八幡のむらのうつりかわり

一、縄文文化	二九
二、弥生文化	三〇
三、古墳文化	三二
跋：獅子懸式土器について	久永春男
あとがき	杉崎章

挿 図

- 第1図 八幡町の地形と遺跡の分布図
- 第2図 砂堆列と遺跡群の分布
- 第3図 堀之内・伝兵衛山断面
- 第4図 野崎遺跡出土の縄文式土器
- 第5図 深山口の石鏡散布地
- 第6図 野崎遺跡・地籍と地点
- 第7図 野崎遺跡・弥生式土器出土状況
- 第8図 野崎遺跡第八地点・発掘区平面図
- 第9図 野崎遺跡出土の石器
- 第10図 野崎遺跡出土・弥生式土器(一)
- 第11図 野崎遺跡出土・弥生式土器(二)
- 第12図 野崎遺跡出土・弥生式土器(三)
- 第13図 野崎遺跡出土・弥生式土器(四)
- 第14図 野崎遺跡出土の須恵器
- 第15図 獅子懸遺跡・地籍と地点
- 第16図 獅子懸遺跡出土の石匙
- 第17図 獅子懸遺跡出土・弥生式土器(一)
- 第18図 獅子懸遺跡出土・弥生式土器(二)
- 第19図 獅子懸遺跡出土・弥生式土器(三)
- 第20図 下内橋遺跡出土の土師器(一)
- 第21図 下内橋遺跡出土の土師器(二)
- 第22図 知多半島を中心とした弥生式土器の編年表
- 第23図 法海寺出土の軒丸瓦
- 第24図 豊橋市瓜郷遺跡出土の野崎第Ⅰ群・第Ⅱ群類似土器
- 第25図 愛知県碧海郡知立神社附近出土弥生式土器

第1圖 八幡町の地形と遺跡の分布図
(縮尺五万分の一)

- 1 野 嶮
- 2 野 子 懸
- 3 八 幡 社
- 4 荒 内 井 橋
- 5 下 堀 切
- 6 堀 中 見 島
- 7 細 中 海 島 寺
- 8 中 法 里 之 脇
- 9 法 里 岩 脇
- 10 里 岩 之 脇
- 11 岩 之 脇 間
- 12 大 西 屋
- 13 棟 屋 敷
- 14 榑 山 島
- 15 脇 深 山 口
- 16 脇 伊 賀 坂
- 17 伊 賀 石
- 18 脇

伊 勢 灣



図版第一



- 最上段 野崎遺跡出土、左から第Ⅰ群
深鉢形土器・第Ⅱ群・第Ⅲ群壺形土器
- 第二段 獅子懸遺跡第四地点出土の第
Ⅱ群壺形土器三個
- 左 野崎遺跡出土の長床式土器に
みとめられた靱帯痕



野崎遺跡の最後の姿（土取り工事の直後）

圖版第二



野崎遺跡第八地点調査状況

左下・北区溝伏遺構

下・第Ⅱ群壺形土器出土



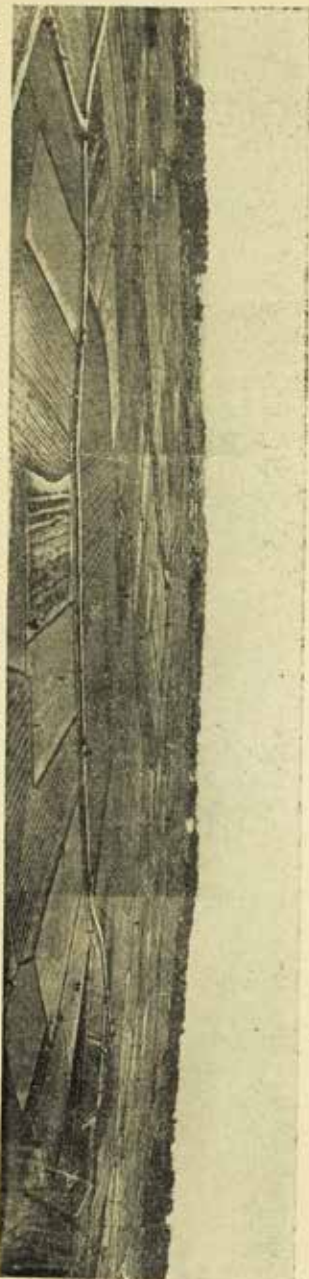
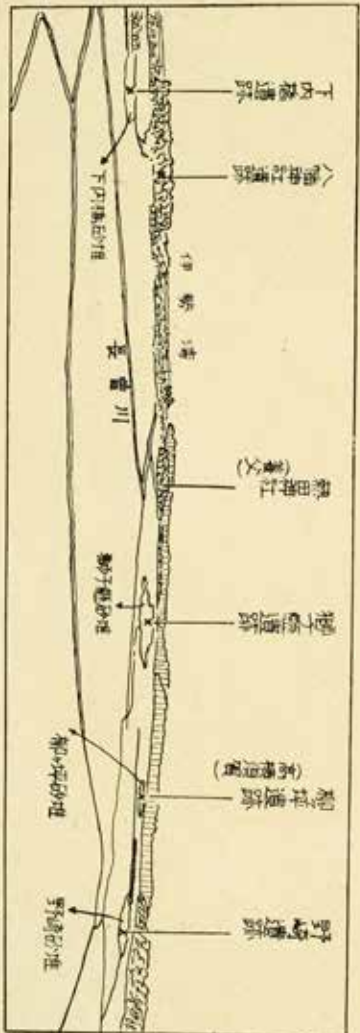
獅子懸遺跡第四地点調査状況

右下・第Ⅱ群壺形土器出土

下・第Ⅱ群壺形土器出土

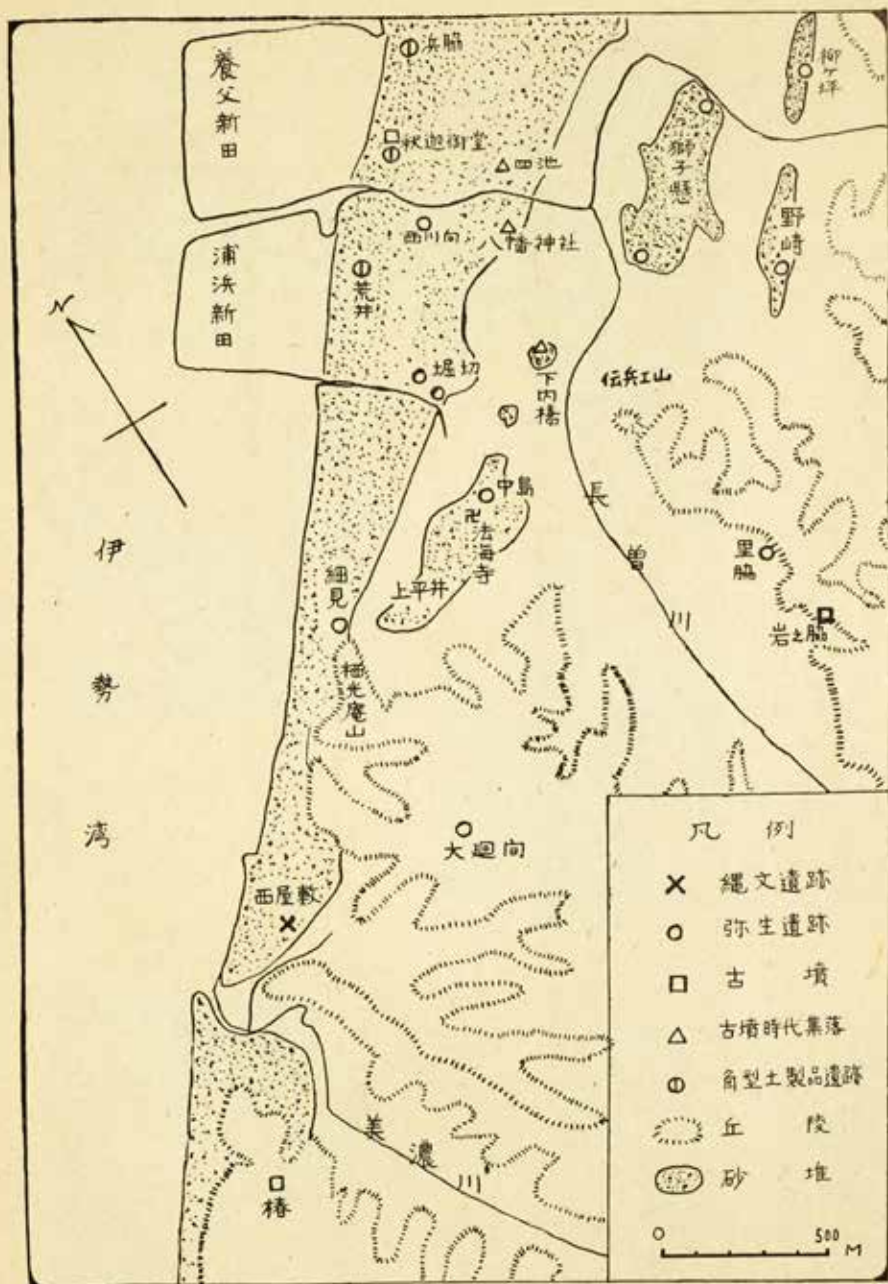


写真解説



野崎山からの展望

- 1 野崎遺跡 野崎第Ⅰ群の土器を主体とした弥生前期の遺跡 (第二章第二節)
- 2 野崎遺跡 野崎第Ⅱ群・第Ⅲ群 (霧子壺式) の土器を主体とした弥生中期の遺跡 (第二章第三節)
- 3 柳ヶ塚遺跡 長床式土器を主体とした弥生中期の遺跡 (第二章第四節)
- 4 下内橋遺跡 土師器を主とした古墳時代遺跡 (第二章第四節)
- 5 八幡神社遺跡 須惠器・土師器を主とした古墳時代遺跡



第2図 砂堆列と遺跡群の分布

第一章 八幡の土地のなりたち

一、丘陵の地質

私たちの町・八幡町は知多半島の基部に近く、伊勢灣にのぞんだところに位置している。そしてその地形は、半島の軀幹となつて第三紀の丘陵と、それらを侵蝕しながら、海岸にむかつてくりひろげられた沖積低地の谷からなりたつてゐる。

知多半島の丘陵は、地質学上おなじく第三紀といつても、新古の二つに大きくわけられており、南知多がまず隆起し、その後において北部が隆起してきたものといわれている。すなわち野間の富具崎より以南は、岩の質がかたくよくしまつてゐるが、以北はおなじような岩質でも、比較的やわらかくてその後の堆積物がのつてゐることを示している。

新しい部分のとくに半島の基部では、亜炭の多くみられる尾張夾炭層が基盤となり、その上に猪高礫層がのり、さらにその上には、第四紀洪積物の堆積と考えられている、八事層とよばれる地層がおつてゐる。本来はこうした層序が広範囲にわたつて整然とかさなつていたのであるが、断層を主とした地盤の変動や、降雨・河川・風波の侵蝕など、自然界における内的・外的営力による各種の天災地変のために、はじめの地層の広がりは失われ、最後の堆積面である八事層は礫岩を主とする部分のみが、山頂に点々と侵蝕をまぬがれて残つてゐる。

八幡町附近でみれば、亜炭とともに巨大な硅化木を出土した八幡字堀之内の伝兵衛山（第3図）をはじめ、八幡中学校西山・黒磯間池南方の山のはな・佐布里の秋葉山、さらに新知の美濃坂・永井坂の各断面にあらわれた青緑色・灰緑色の粘土層や、硅砂を主とした砂層などは、ほとんどすべて尾張夾炭層に属し、この層の粘土は地圧のために強くおしつけられており、乾燥するるとまかくわれるのが特徴である。第

三紀の最上層にあたる猪高礫層は、とくに八幡新田の地域に発達しているが、この層の砂も花崗岩の風化したものであり、硅砂が主体であるが長石の含有が多く手でつぶすと指先が白くなるのである。第三紀層の上をかつては洪積層に属する八事層がおつていたのであるが、砂や粘土の層は長い期間



第3図 堀之内伝兵衛山断面（昭和31年3月）

に流しさらされて、今では礫層の部分が山頂に残り、赤褐色またはピンク色をあらわしているのが一般的である。

これらの丘陵をつくりあげている地層は、地盤の変動がもたらした傾動地塊をなして、東ないし南東にむかつて傾斜しており、丘陵の地形も東面はゆるやかであるが、西面は急な傾斜をしている。そのため伊勢灣岸に近い西の方には尾張夾炭層などの下部の地層が比較的高位置にまで露出しているのに対し、東の方には上位のものが順次併行して分布している状態である。

二、侵蝕谷の成立

知多半島はもともと、伊勢灣・衣が浦の両灣が、かん没したことによつてできたものであるが、かつての海岸線は現在のそれより数軒にわたり、沖合にでていたことが、伊勢灣の海面からうかがわれる。海面下にかくれているそれらの地域もまた、さきにもべた丘陵部とおなじく尾張夾炭層のつづきであることは、沿海部を試雑した資料でも明らかである。しかも現在は海面下にかくれてしまったその部分の地形を、海図をたよりに観察すると、その後の堆積をあまりうけていない大野附近には沈水した谷が顯著にみとめられるが、八幡町の地先にもそれとおなじような谷のあることがうかがわれる。ただ八幡町附近から北部にかけて海岸附近の海底の多くが、新しい堆積物と考えられる砂におおわれているので、海の底にかくれた谷の原地形が、十分に表現されていないのがおしまれる。さらにこれらの谷の方向をみると、海底の谷のすべてが現在の大野谷から新知の谷・寺本の谷など陸上にあらわれている谷と、それぞれつながつ

ていることが知られる。こうした事実は海蝕をうけて海崖状になつた現在の海岸線がつくられる前の時代、知多半島の幅がもつと沖へ広がつていたところに、侵蝕されてできた古い谷が海面下に残されていることをあらわし、その古い谷底は現在の新しい谷底とは明らかに区別して考えることができる。

名鉄電車の寺本駅東で八幡酪農協同組合が井戸を掘つた時の際井資料によれば、地表から尾張夾炭層と考える硬質粘土層まで十三米をはかり、目にうつる現実の地形からは想像できないような、けわしい谷がかくれていることを示し、海図にあらわれた海底の谷とともに、一見ならかな沖積低地の面の下には、丘陵の起伏に相当するような、侵蝕谷の原地形がつかまれていることを教えている。

こうしたはげしい侵蝕は、やがてまた大きな堆積をもたらし、起伏にとんだ侵蝕谷の原地形は一樣にうめられていつた。この時の堆積の大部分は、地上におけるゆるいゆるい扇状地といった状態ではなくて、試雑資料は前述した八幡酪農協同組合の井戸のように、第三紀の岩盤の上には十米以上も、海底における堆積をあらわしている貝まじりの粗砂層であることを記録している。このような海成粗砂層はほとんど丘陵の下まで分布しており、かつての時代に寺本の獅子懸・野崎附近はもちろん佐布里の谷まで、新知では永井の谷の奥にも海が侵入していたことをあらわしている。今、長曾川（ながそががわ）の川底の兩岸にみられる扇序に気をくばりながらみると、第三紀の岩盤のけずられた侵蝕谷の時代から、谷の奥まで海がいきりこんでいた時代に、貝まじりの粗砂層が堆積していく地形の推移がうかがわれる。

三、海侵と海退

半島北部の丘陵が第三紀の新しい地質であることは、この地域が半島南部とくらべてはげしい侵蝕をうける原因となつた。そしてその次にやつてきた海侵の時代には、けわしい起伏をもつたまま谷の多くは海底に沈み、さらに海底で堆積作用をうけて、谷は貝まじりの砂層ではとんどうまつてしまつた。谷をうづめた砂層の表面は、深い谷のあることさえも考えさせないほど平らかな浅海底になつたが、やがて海岸線の後退した時期にあたつて、その浅海底は地上へあらわれてきたのである。

海岸線の前進後退をうながすものは、地盤の隆起沈降であるとともに、もう一つは気温の変化とつながる海水位の変動によるといわれている(註1)。つまり気温の低いときは、地球上の水分の相当部分は氷となつて陸上に存在する。そのため海水が減少して海岸線が後退する。そのもつとも極端な例が氷河時代であり、地球上における陸地の海に対する比が大きく、日本列島が大陸と陸つづきであったり、知多半島が伊勢灣の沖へ出ばつていた時代も、この時期にはかならない。一万数千年前にあたる最後の氷河期でも、海面は現在より七十一九十米ほど低かつたといわれる。

氷河期がおわり、気温が高くなると氷のとけた水ははげしいきおいで海にはいり、海水位は急激に上昇して各所に入江を生じ、谷の奥まで波にあらわれるようになった。前節でのべたようにこの地域の侵蝕谷の奥まで海がはいった時代はこのころであり、海岸に近い海底には河川の流しだした土砂がきかんに堆積した。この海成に

よる砂層が有楽町貝層であり、濃尾平野では南陽町層とよばれ、平均五十米以上の堆積をみせている。八幡館農協同組合の地点や長曾川下内橋北の地点では、表土下それぞれ百五十釐・七十五釐の下は尾張夾炭層の岩盤にいたるまでこの層がみとめられる。

この時代すでに知多半島には集落のあとがみられ、東浦町緒川の入海貝塚・師崎町大井の人道遺跡(註2)。旭町(現、知多町)南粕谷の森西貝塚などの遺跡であり、これらの時代は縄文文化の早期末から前期初頭として編年され、すべて台地の上に立地して鹿・猪や魚貝の類をとりながら生活をいとなんでいたものである。知多半島における遺跡の発祥は、この時代以後の地形の変遷を、遺跡との関連、いかえれば自然と人間の有機的な生活関係として、研究されていく必要をもとめている。八幡町の地域ではまだこの時代の遺跡を発見するところまでにはいたっていないが、やはり野崎の東や南の丘陵には、そうした時代の遺跡がねむつていられるらしく、野崎遺跡の砂の中から波にあらわれているが、入海貝塚の土器と同系列の土器片(第4図)を採集している。



第4図 野崎遺跡出土の縄文式土器上、早期のせんい土器下、中期の加曾利E式土器

こうして侵蝕谷の奥まで海のはいつたことは、貝まじりの粗砂層の堆積とともにこの時期の遺跡が沖積層の上には一つも分布しないことから実証されるが、それぞれの谷における海侵が頂点になつた時期は、地球上に共通の作用である海水位の上下運動のほか、地域ごとの地盤変動の影響もあり、実際の海岸線の変化は複雑なすがたをみせる。関東地方では千葉県の姥山遺跡の時代(縄文中期・加曾利式)はすでに海退がはじまつており、その年代は放射性炭素による測定で約四千五百年前とされている。海面上昇運動の終末と地盤の隆起により、現在の沖積低地は陸化し海成層の堆積による海岸平野が形成された。

私たちの八幡町における寺木につづいた佐布里の谷、朝倉と古見にわかれた新知の谷が陸化して、海成の砂層が地上にあらわれてきたのは、この海退期で海水面は約五米低下したと考えられる。現在の海岸線の成立年代については、なお研究中であるが大体にして縄文後期の時代と推定(註3)でき、晩期の中葉にはすでに現在のもつとも新しい海岸砂堆の上に、朝倉の西屋敷貝塚など大きな集落がいとなまれるにいたつた。しかし南につづいた大野谷では、その時代旭町(現、知多町)大草の東畑貝塚が大草台地の東縁にあり、いまだ大野谷が深く海となつて濶入していたことを示しており、普遍的な海水位の上下運動に対し局地的な地盤の変動は大きな差をえがいて、地形の変化に影響していることをあらわしている。

四、砂堆列の形成

いわゆる海岸平野とくらべれば、比較のしようもない小天地では

あるが、八幡町の谷をうめた沖積低地の中では、横須賀とつづいた寺木の谷がもつとも大規模であり、砂堆(註4)列(第2図)の分布もこの谷でとくに顕著にみとめられる。いまこの谷では現在の海岸線と平行に、河本かの砂堆が小丘状をなして横たわつてゐる。すなわち谷の奥に野崎砂堆が横須賀の榑ヶ坪砂堆につづいており、また上平井・中島・下内橋・獅子懸とつづいた第二線、さらに西平井・小根・荒井・荒古から横須賀の養父にのびて、現在の海岸線となつている第三線が併列している。

前章でふれたようにこの沖積低地は、第三紀の新層に属するこの地域の丘陵に発達した侵蝕谷が、その後の海侵のために海底へ沈んだ時、附近の河川がもたらした土砂の堆積により形成された浅海底が、隆起して地上へあらわれたものである。そして前述した三本の系列にわけられる砂堆列は、陸化前後の浅海底の地形をあらわすものである。

谷の奥の榑ヶ坪・野崎の第一砂堆が、この谷における第一沿岸州であることはいうまでもないが、第二砂堆の獅子懸と比較してみると、二つの砂堆の間隔があまりにせまいこと、さらに小丘を形成している砂の粒子をみると、野崎砂堆では割合にこまかく平均しているのたいし、獅子懸砂堆の場合つきかさなつてゐる砂層の中に、径一—二種の小礫の混入が多くみとめられ、さらに径〇・五—一厘米の小礫のみの間層が存在するなど、野崎砂堆が形成されていた当時すでに約二百米の地先に第二沿岸州が存在して、満つれば海中に没し干潮の時はわずかにすがたをあらわす状態であつた。この場合すでに潮流による支配的な堆積は、第二沿岸州であつた獅子懸砂堆に

おいておこなわれ、選別された微粒子の砂のみが野崎砂堆に到達したものと推定される。

獅子懸砂堆を彎曲の頂点にもつた第二砂堆の系列は、北の方横須賀町の高横須賀から大田へつづき、南半分の寺木地内においては、下内橋・中島・上平井の砂堆をつないで、南の彎頭である栖光庵山にいたつてゐる。この場合、現在の海岸線にたいして上平井砂堆のもつ角度(第二図)は、第二砂堆を海岸線にもつた時代のいちじるしい特徴の一つである。さらに下内橋砂堆から獅子懸砂堆にいたる彎曲の角度は、廻間・堀之内よりのびてきた第三紀丘陵の海底侵蝕面が、地表面下に浅くのびてゐることによる。

獅子懸砂堆の位置において、約五百米をへだてて現在の海岸線を形成している第三砂堆群が併列しており、第三砂堆列の場合には現在の海岸線にみるように、南は西平井の栖光庵山の西麓より、北は大田の北端にいたるまでほぼ一直線をもつてつながつてゐる。

一方、新知の谷においても朝倉の谷・古見の谷のいずれにも、寺本の谷とおなじように砂堆が形成されているが、小さい丘陵により朝倉・古見の二つの谷に区別されているなど、砂堆の発達するための基礎になる谷の地形や、面積の関係もあつて規模は比較的に小さい。

従来、侵蝕谷の陸化する過程を、三角洲が徐々に前進して浅海底をうめたように、しばしば説かれるが、実際は海岸平野(旧浅海底)を河川堆積物がうすくおつてゐるにすぎなく、海成の粗砂層面が現在の海面より高い点からも、三角州の漸進陸化説の正しくないことがわかる(註5)。

五、自然の低湿地

新知字西屋敷の縄文晩期の貝塚が、もつとも新しい砂堆の上になまれていることから、この地域の沖積低地が縄文後晩期の時代には、すでに陸化してゐたものとおしはかるのであるが、新しく陸化された陸地面には、さらに新しい侵蝕がくわえられて、新しい谷状の起伏をつくり、井関弘太郎氏のいう「沖積層におけるもつとも新しい不整合」が成立したのである。

その後、紀元少し前のころ気候の急激な変化か、あるいは広範囲な地盤の変動によるかはいまだはつきりしてゐないが、海水位がわずかながらふたたび上昇したため、それらの新しい谷が湿地化した。そのころはちやうど日本に米作のはいつた時期でもあつたので、それらの湿地は直まきによる水田農耕、初期の弥生文化にとつて最良の水田となつた。

こうした沖積低地につくられた新しい谷の湿地が、現在は海成砂層面の上部にしばしば、黒泥土層・泥炭層あるいはそれらをふくんだ黒褐色のシルト層としてのこつてゐる(註5)。前にあげた長會川下内橋北の川岸では、九十四層の表土の下に二十六層の黒泥土層があり、一米二〇層から下は海成の粗砂層となり、さらに一米四〇層の川底には、尾張夾炭層の露頭がみとめられる。黒泥土の層の中には、ヨシ・アシなど禾本科の植物の腐蝕したものがふくまれており、かつてこの附近が沼地であつた時代に、これらの植物がはえては枯れ、枯れてはつもつてこの水底に堆積したことを示してゐる。

トヨアシ原の国とはこうした景色のひろく分布したがたの表現であらう。

私たちの地域では、侵蝕谷の出口を砂州でふさがれた時に、谷の水が流れたす道をうしなつた場合、そこにはやがて黒泥土が底に堆積するような、自然の沼地が形成されるのが普通であり、あるいは砂堆と砂堆にはさまれた中間低地や、二つの谷がであうような地点にもこの層が発達している。佐布里における二つの谷があわさつていよいよ広い低地へでようとする阿原の地点、野崎砂堆でふさがれた奥の谷、あるいは前にのべた下内橋附近、さらに今の小字名にはなっていないが、ミズオチ・ヌマガイトといわれる中島と堀切の中間低地にも分布している。新知の谷でも西屋敷貝塚のある砂堆の内側には、台地と砂堆にはさまれた地点に小規模ではあるがみとめることができる。

さらにつぎの時代、河川あるいは洪水による堆積がいちじるしくなり、黒泥土の地帯も現在の表土層の下にみとめられる暗灰色シルト層により、約一米前後の厚さでうめられてしまった。しかしこの地域における黒泥土地帯の上をおおう堆積は、他の沖積平野と比して、時期が相当おくれしており、横須賀町加木屋の谷では、黒泥土層の直上から山塚・山圓をふくんだ古代末・中世初めの遺物が出土していることでもわかる。

註

- ① 井関弘太郎「地学と考古学」(日本考古学講座2所収)
② 昭和三十年五月、本遺跡発見者の山本善輔氏より教示をうけ

た。その後、名古屋大学により学術調査がおこなわれ、天神山遺跡と改称された遺跡である。

- ③ 野崎遺跡では縄文早期の土器片とともに、縄文中期の土器片が海底における二次堆積のすがたでみとめられ、縄文中期の時代にはいまだ海侵状態であつたことがわかる。

- ④ 海底において堆積した沿岸州が、地盤の隆起により、地上にすがたをあらわしているもので、砂堆という名称は東京大学多田文男・名古屋大学井関弘太郎の両氏が現地踏査の結果、教示されたものである。柳ヶ坪遺跡の報告(一九五三年横須賀中学校刊)、考古学と郷土教育・中学校の実践(一九五五年日本考古学講座1所収河出書房刊)の中で砂丘あるいは浜堤と称していたものをすべて砂堆と統一訂正する。

- ⑤ 井関弘太郎「弥生時代の土地利用」(日本考古学講座4所収)

第二章 八幡のむらのあけぼの

一、遺跡の分布

八幡町における原始時代から古代におよぶ遺跡は、古墳のほかには低地にのぞんだ丘の端にある二・三の例をのぞくと、丘陵地帯にはほとんど発見されておらず、大部分の遺跡は寺本・朝倉の低地に集まっている。いま各地域にわけて分布をあげてみよう。

1 八幡新田の丘陵 丘陵地帯におけるわずかな例が、この地域で発見されている。この地域は伊勢湾にそつた上野町から、東海岸の半田にいたる、知多半島を斜めに縦断した断層状の谷が、西海岸と東海岸に谷の水をわけている位置にあるが、その谷をはさんで東には緒川新田の山之神遺跡があり、西の丘陵には八幡新田の深山遺跡がある。ともに石鏃散布地であり土器はみられない。山之神の石鏃散布地は相当前より知られていたものであるが、深山口の場合、地主である平松五三郎氏が明治末年ごろより採集をつづけられてきたもので、石鏃の数は三十をこしているが、いまだひろく紹介されていないものである。石鏃の形は無茎のものが圧倒的であるが、有茎のものも三個まじりその一個は肩がある。すべて打製である。

2 寺本の低地 一方、丘をおりて沖積低地へくたると、遺跡の数はめだつて多くなる。横須賀につづいた寺本の谷では、前章にのべた砂堆列のほとんどに集落のあとがみられ、また侵蝕谷がさらに丘陵をこまかくきざんだ支谷の湿地に面した遺跡が台地のへりに位

置している。そして後者の例は堀田鎌吉氏・富田星義氏がそれぞれ資料を所蔵する綱間の里脇遺跡や、字坂蓋の石ヶ脇遺跡、また加藤五茂助氏により発見された伊賀坂の遺跡がこれである。里脇遺跡の資料は太型ハマグリ刃石斧であり、石ヶ脇遺跡出土の完形のヒサゴ形壺形土器とともに弥生式と考えられる。伊賀坂遺跡の土器群はまた須恵器をとまなわな古式の土師器である。



第5図 深山口の石鏃散布地

さらに沖積低地の遺跡はすべて砂堆上にあり、台地と砂堆、砂堆と砂堆にはさまれて現在、水田となつていられるような低地にはみられない。第一砂堆の方から砂堆毎に遺跡の分布をみよう。私たちが第一砂堆としてあげた二つの砂堆には、それぞれ寺本の野崎遺跡と横須賀町の柳ヶ坪遺跡があり、野崎遺跡の主体となる土

器は野崎遺跡第Ⅰ群としてわけた土器であり、それにつづく第Ⅱ群の土器、さらに第Ⅲ群の土器などのほか、長床式・寄道式・欠山式など弥生式土器の比較的新しい時期のものから、須恵器・山塚・内耳鍋などが出土する。すなわち弥生文化の前期・中期・後期から古墳・奈良・平安時代をへて中世にまでいたる遺跡である。一方の柳ヶ坪遺跡では、野崎遺跡の第Ⅲ群の土器もわずかにみとめられるが、主体をなしているのは次の長床式の土器である。そして寄道式・欠山式の土器も採集され、両遺跡とも安定した定住集落を示す歴代遺跡である。

第二砂堆では、砂堆列の一番おくで第一砂堆の野崎と約二百米の間隔で併列している獅子懸砂堆の上に獅子懸遺跡がある。遺跡のことも采えた時期は前述した野崎・柳ヶ坪の両遺跡の主体をなした時期の間であり、野崎遺跡で第Ⅱ群とした土器群のうち、獅子懸式として類別した型式の標式となる遺跡である。そのほかにも野崎遺跡の第Ⅰ群・第Ⅱ群の資料もみられ、さらに弥生式の新しい土器から古墳時代の須恵器・土師器まで出土する遺跡であり、野崎・柳ヶ坪の両遺跡とともにこの谷における代表的な弥生文化の歴代遺跡である。そして南につづく砂堆列には、下内橋砂堆における古式の土師器を主とした下内橋遺跡、さらに中島より上平井の砂堆の中央部に、天台宗の葉王山法海寺という古刹があるが、寺域をふくめて東の部分に弥生後期の欠山式土器がでた中島遺跡があり、平松知司氏が完形の壺形土器を蔵している。

現在の海岸線となつて第三砂堆では、横須賀町の地籍ではあるが養父川南岸の西川向遺跡より、欠山式の完形壺形土器が出土し

ている。またそれより南方二百米の地点にも弥生後期の堀切遺跡があり、寄道式の壺形土器を平松五三郎氏が採集所蔵している。また南へ五十米はなれた同遺跡第二地点よりも、欠山式の壺形土器を加藤五茂助氏が採集している。明治末年に名鉄電車の線路が建設された時、八幡神社社域より出土した古墳時代の須恵器（はそう・平瓶）が八幡神社に所蔵されているが、南方のほど近い地点で養父川をへだてた横須賀町の島之内・四ツ池よりも、須恵器・土師器の出土が伝えられており、八幡神社遺跡群ともいうべきであろう。さらに南方へいって、栖光庵山に近い細見遺跡から、弥生後期の土器片を小島善一氏が採集しておられる。

一方、近世末にきずかれた干拓地をのぞいて、もつとも新しい海岸汀線をなしている第三砂堆の外側には、伊勢湾・三河湾の沿海部に共通な、いわゆる角形土製品をメルクマールにした漁村集落の遺跡群が、横須賀の海岸にひきつづいて分布しており、そのもつとも規模の大きいものが荒井遺跡である。

さらに寺本の地域に現存する古墳の確実な遺跡は、廻間の岩之脇古墳一基であるが、横穴式石室を破壊され、石室をきずいていた石材は八幡神社・大祥院・極楽寺などへ移転されていて、遺跡は消滅し出土品も知られていない。ほかに社山に古墳があり、出土した勾玉を法海寺へおさめたとの記録が近世末の古書にみえるが、法海寺の什物の中にもみとめられず、遺跡を確認するすべがない。なお第三砂堆における神明社の社頭に、古来イワサカといつて神聖視されている花崗岩が一個たつており、横穴式石室の奥室がのこつたものとも考えられ、社山の例とともに参考地としてあげておこう。

3 新知の地域 新知の低地は、寺本の低地にくらべて面積が小さい上に、それがさらに小丘によつて朝倉・古見の二つの谷にわけられているので、低地を対象とした大遺跡が繁栄する条件にめぐまれていない。

朝倉の谷では、現在の海岸線をなしている砂堆の内側にそつて西屋敷貝塚がある。遺跡は海面よりの比高は四米にたりない低地であるが、縄文晩期中葉に編年され、いまだ狩猟と漁撈の採集生活をしてきた時代の集落である。また台地の上の大瀬間遺跡は花井董氏によつて発見されたもので、欠山式の高塚形土器が採集されている。

さらに古見へいくと、海拔約二十米の海にのぞんだ台地の上に榊古墳がある。古見神明社南方約三十米の丘陵つづきであり、遺跡の現状は横穴式石室が破壊されたまま六個の石材が散在しているにすぎないが、出土した脚付埴・埴・塚・高塚・はそうなど十三点の須恵器は国立東京博物館におさめられている。同じく国立東京博物館には八幡町大字新知の出土品として高塚・はそう・蓋付埴など五点の須恵器が保管されているが、これも榊古墳の遺物であるのか、それとも遺跡を別にした土器であるのか明らかではない。

4 佐布里の谷 寺本の低地からいりこんだ佐布里の谷では、谷の中央は深い湿地をなしており、耕地として利用するには高度の技術を必要とするが、さらに丘陵を侵蝕している支谷では、いわゆる谷頭水田を利用した初期農業の小集落がみられたらしく、伊藤亮一氏は脇島から欠山式土器の資料を採集された。

二、野崎遺跡

1

野崎遺跡は、寺本・横須賀の谷をうめた沖積低地のもつとも奥に形成されている第一砂堆列のうち、南にのびた野崎砂堆の上にある。野崎砂堆は海拔約五米・現在水田面との比高は二米の低平な丘をなしており、この谷が浅海底であった海侵期のころ、沿岸州として堆積した海成の粗砂層によりできている。

砂堆は現在、知多半島の北部・西部の代表的な農作物である玉葱をはじめとして、トマト・西瓜などを促成栽培するのに好適の耕地としてつかわれている。しかし土地が砂質であることはまた乾燥が早く、日照りともなるとほとんど各地籍ごとにはられた野井戸から水をくむ仕事は農家の大きな負担となつてゐる。そうした乾燥を少しでも防ぐために、砂堆の地盤を水田面の直上までさげることが考えられ、戦後は機会あるごとに土取りがなされてきた。遺跡の発見は、こうした工事にともなつてなされたものであり、平松五三郎氏は石鐵五個を、富田四郎氏が須恵器の平瓶を採集されたのがこれである。森岡政一氏はこれらの出土品に注目され、このころから折をみて広く紹介の勞をとつておられたものである。ところが昭和二十八年の秋に知多半島の海岸線が台風十三号の大被害をうけてからは、砂堆の床さげによる土取り工事が急激に度を加えてきた。損害をうけた干拓地に客土するために、この土砂が運搬され、出土資料もそれにとりなつて以前とは比較できない程に豊かになつてきた。

こうして発見され、おし進められてきた野崎遺跡調査は、工事の

過程と平行した資料の採集により、三つの段階に区分することができるとする。

一、戦後、土取りがおこなわれるようになってから昭和二十六年ごろまでの間に、床下げされた時期である。



第6図 野崎遺跡・地籍と地点
(算用数字は地番、漢数字は地点)
愛知県知多郡知多町八幡字野崎
遺物採集地番と地主

23の1	早川源次郎	72	加古 憲一
23の2	早川栄二郎	73	花井兼次郎
69	早川丈太郎	74・75	伊藤 覚一
70	堀田 市藏	77	坂野 鎮一
71	小島弥太郎	80	富田 星義

二、昭和二十八年九月の台風十三号以後、干拓地の塩害田へ客土するために土取りがおこなわれるようになった時期である。

三、町史編纂委員会の事業としての発掘調査によるものである。

これらの調査段階は資料価値の上からも、調査区域の面からもいうことができる。すなわち一の段階ではわずかに地主をはじめとした郷土史に関心をもつ人が、採集していたもので区域の拡大に比べて数量はわずかである。完形の資料が多いが出土状況・遺構の形態はわからない。しかし二の段階になると、工事のはじまった昭和二十九年八月から三十年の三月まで、すでに町史編纂委員会がつくられた後でもあるので、委員長の加藤五茂助氏とともにほとんど全期間、工事の現場に立会つたり工事の直後を継続調査していつたもので、とくにたてあな内の一括遺物として調査できた資料は三の調査資料と同価値をもつべきものである。たてあな出土のままとまつた遺物としてわけることのできなかつた資料も、採集した地籍のメモに留意していつたので番地ごとに分けることができる。三の調査については町史編纂委員会の事業として、調査をおこなつたものである。

2

野崎砂堆のうち現在までに遺跡がみとめられている兩方地域では、堆積している砂の層位が南西にむかつてわずかに傾斜している関係から、野崎八十番地の附近では床さげした後の耕地面にも、たてあなの下部が比較的明らかに残つており、遺構の位置を容易に確認していくことができた。

第一地点 野崎八十番地の南西隅にある。工事の途中でこの地点から相当量の資料をえたが、地主の富田星義氏の了解をえて同じ番地にある第二・第三地点とともに調査することができた。黄褐色砂層を黒褐色砂層のたてあながきりこんでおり、たてあなの底にあたる部分が深さ四十五釐・南北七十釐・東西八十五釐のはぼ楕円形をなして残つていた。出土した土器は野崎遺跡第一群としてわけた土器で、野崎遺跡全体を通じて資料がもつともよくまとまつてい

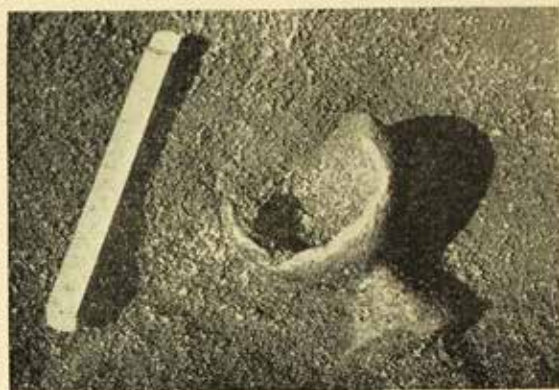
る。

第二地点 野崎八十番地の西の境界にそつて、中央から北へ長さ約三米の細長い溝状の遺構がある。しかしその中からは遺物は一点もみとめられなかつた。

第三地点 第一・第二両地点とおなじ野崎八十番地の東北隅に近くたてあながみとめられ、この地点では野崎遺跡第一群の土器が出土した。

第四地点 野崎七十四番地の東南隅にたてあなの底をまるく残していた。黒褐色砂層の中に野崎遺跡第一群の深鉢形と考えられるあらゆる条痕のついた土器が数片みとめられた。

第五地点 野崎の七十番地・七十四番地の境界にまたがつて発見されたたてあなで、この地点が土取りの際に、最後まで車の通路となつていたので充分に調査することができたが、東西一・三米で深さ九十五釐のたてあなを、西にわずかにたつた東西の巾一米・深さ七十八釐のたてあながかさなつた形であり、いずれも南北の巾がみじかい楕円形である。土器は全部が野崎遺跡第一群に属しており、条痕のついた深鉢形の土器片とともに、頸部に近く草の茎で流



第7図 野崎遺跡・弥生式土器出土状況

水文をほどこし胴部は条痕となつた壺形土器もみとめられた。

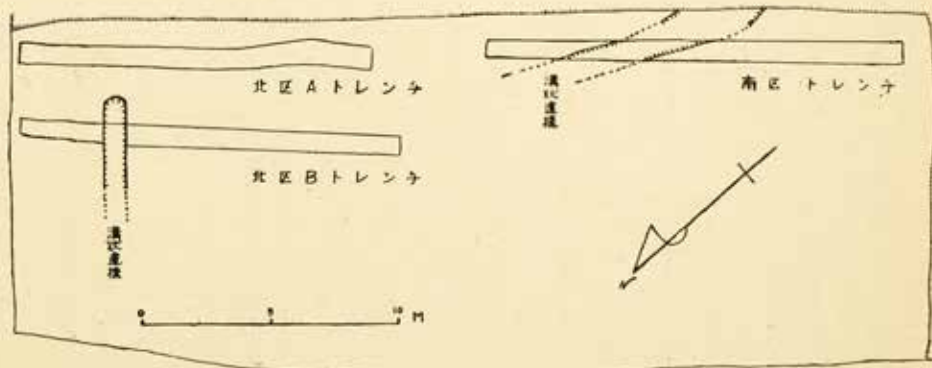
第六地点 野崎七十番地の北端に近く不整形の小さいたてあながあり、黒褐色砂層の中より野崎遺跡第一群の完形深鉢形土器がみとめられた地点である。

野崎二十三番地にそつた道路の西壁にある。表土下五十糎より器壁のうすい完形の高塚形土器を二個体出土した。口径七・七糎・高さ八・一糎という小形で弥生式終末期のものであろう。

第八地点 第八地点は昭和三十年十二月二十七日から三日間、八幡町史編纂委員会の事業として発掘調査を実施した野崎六十九番地である。十三号台風以来つづいてなされてきた土取り工事により野崎遺跡はほとんど潰滅状態に近くなつてきたが、最後にのこされた地点の一つとして地主の早川丈太郎氏・耕作者の相江しげ氏の厚意

により調査をすすめることができた。

野崎六十九番地の畑は北をのぞいた三方がすでに地盤がさげられ、東に接する七十番地との境界は高さ約一米の段をなしているが、断面に二つのだてあなが露出している。調査は東の断面に近い部分を、中央から南区と北区にわけて発掘をすすめた。断面から南区のトレンチへつづいているたてあなは溝状となつて斜めに北西へのびていた。遺構の中からは野崎遺跡第一群の条痕をもつた土器が数片みとめられた。さらに北区では耕地の關係で東に接した畑との土堤をとりはずすことができないので、断面にあらわれたたてあなの面から



第8図 野崎遺跡第八地点・発掘区平面図(野崎69番地)

四十鞭の間隔をとつて北トレンチを設定したところ、断面の遺構はトレンチへつづいていないことがわかつた。すでに土取りがおわつた東の畑に主体がおかれ、この地区へはわずかにかかつているのみであつた。トレンチの南よりの部分に表土下四十鞭の深さで一つの面があらわれ、この遺跡で第Ⅱ群にかけた土器が一個体つゞれた様子(図版第二)で、出土した。同じ地点にならんで出土した同一個体の土器片でありながら、内側が上になつていたものは文様が完全にこつていたのに、文様面が上になつていた破片は表裏の見分けができない程に磨滅していた。土器が放棄されたあとすぐに他のものが堆積したのではなく、相当時間にわたり地表にころがつていたのであろう。北区ではこのトレンチをAとし、さらに西側へ約二米の間隔で平行したBトレンチを掘つたところ、トレンチの南端においてAトレンチとおなじ状態で、野崎遺跡第Ⅱ群に属する土器が二個体分みとめられた。そして北端に近く表土下約三十鞭でこのトレンチと直交しながら西へのびた溝状の遺構を発見したが、A・B両トレンチの中央よりはじまり巾約七十鞭・底までの深さ約五十鞭であるが、西の方はどこまでのびているのか耕作物の関係で調査不能であつた。そして遺構の中からは弥生後期と思われる粗製の甕形土器が出土し、野崎遺跡第Ⅱ群の土器が数片まじつていた。遺構の時期は弥生後期と推定され、混入した数片の古式の資料は当時の表面からおちこんだものであろう。

3

野崎遺跡から出土した遺物は、石器と土器であり、骨角器は発見

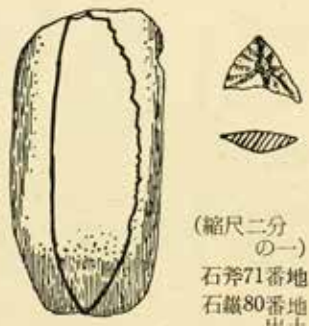
されていない。そして土器は縄文式土器と弥生式土器および須恵器・その他にわけらる。

石器 石鏃と石斧である。石鏃は八十番地で採集した一個と、平松五三郎氏が所蔵する五個であり、平松氏所蔵の石鏃は肩が目立つものが多くすべて有茎である。石斧は七十一番地で採集した小形のハマグリ刃石斧の一個である。

縄文式土器 発見された資料は二片(第4図)であり、一片は縄文早期末に編年されている入海貝塚と同系列のもので、圧痕をもつた口縁端につづいて爪形文が一条施文されており器壁にはせみい痕が目立つ。そして他の一片は縄文中期の加曾利E式土器である。いずれも表面が相当磨滅しており、この谷がいまだ海底であつたところに、波にあらわれながら堆積したものであろうとおもわれる。

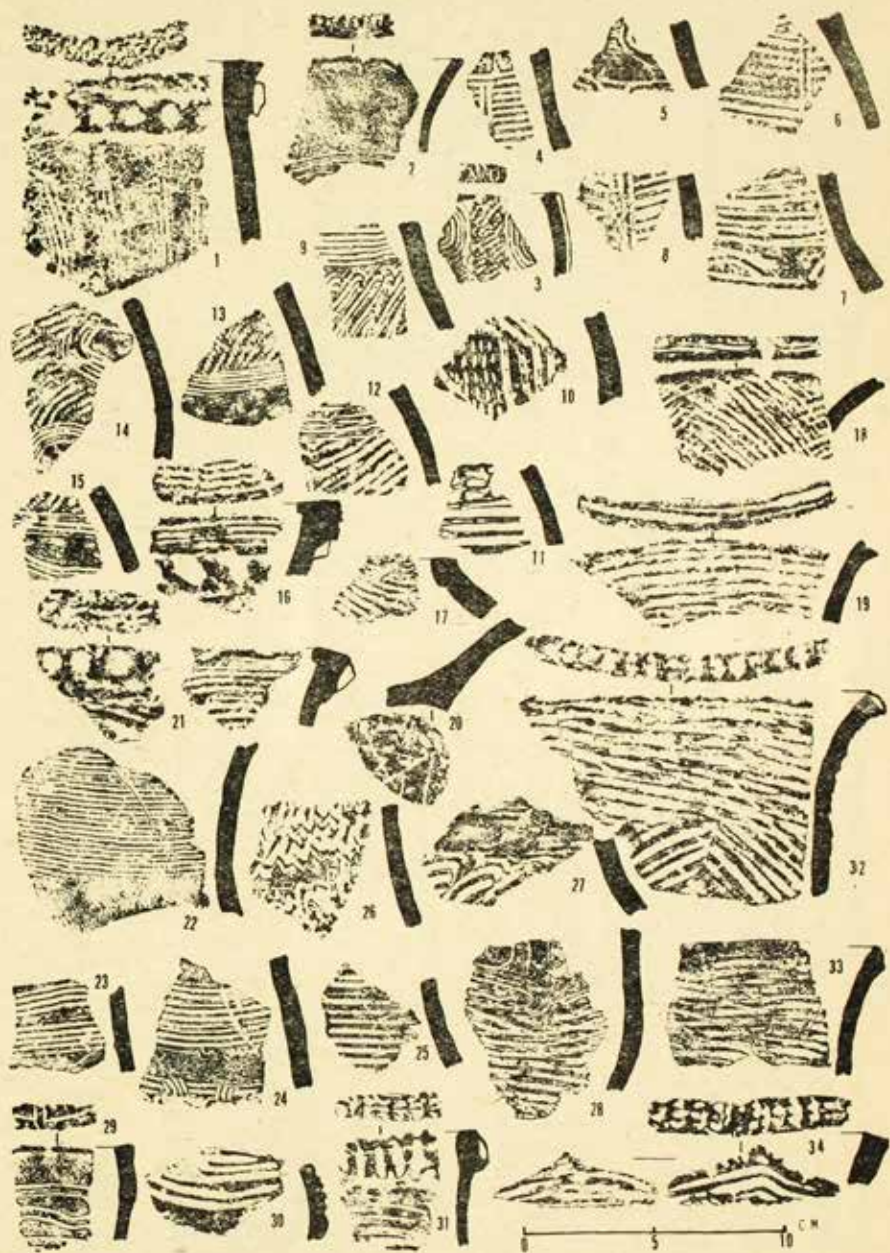
弥生式土器 出土した弥生式土器は、長床式や寄道式・欠山式に属する新しい時期のものも少しづつみとめられるが、大部分をしめる資料は大きく三つに分類することができる。

第Ⅰ群の土器は、野崎遺跡でもつとも多くの資料がでており、第一地点でまとまつた資料がみられる。すなわち第一地点から出土した土器は甕形土器・無頸甕形土器・深鉢形土器にわけられる。甕形土器の口縁部では、口縁端に櫛状器具による列点がほどこされ、口縁



第9図野崎遺跡出土の石器

(縮尺二分の一)
石斧71番地出土
石鏃80番地出土

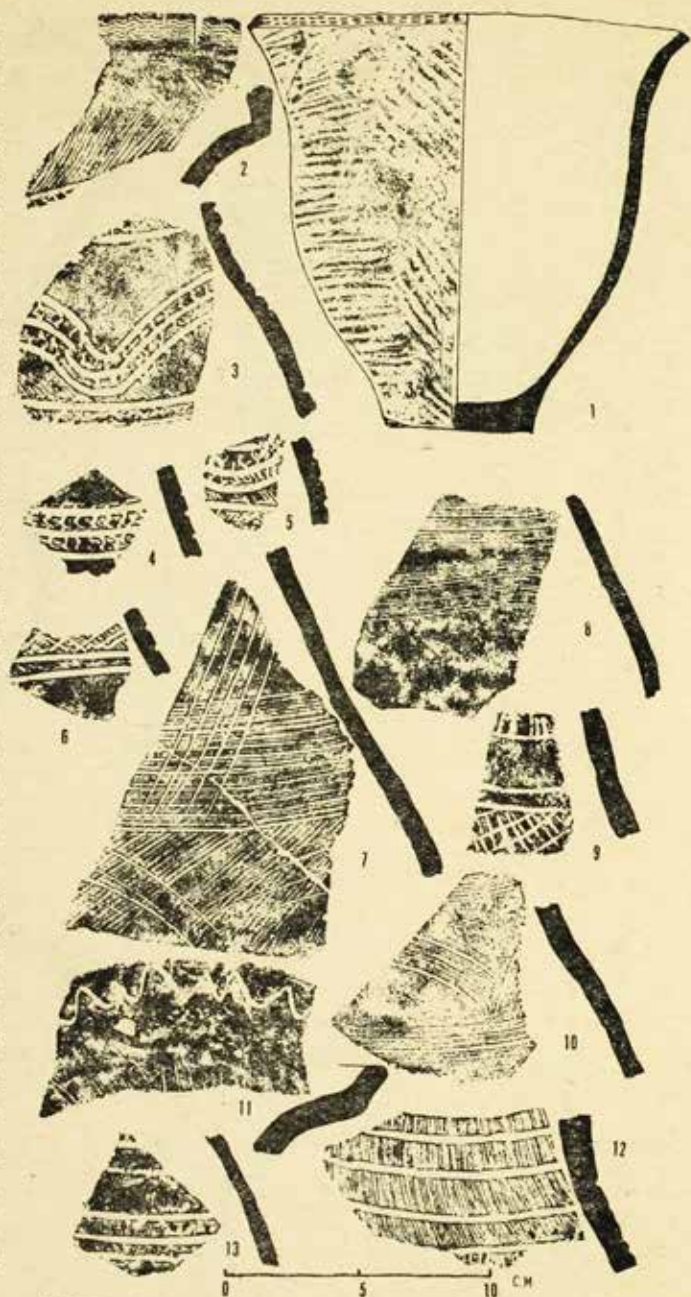


第10图 野崎遺跡出土・弥生式土器(一)

第I群土器

1~20(第一地点出土)、22・23(第三地点出土)、28(第五地点出土)

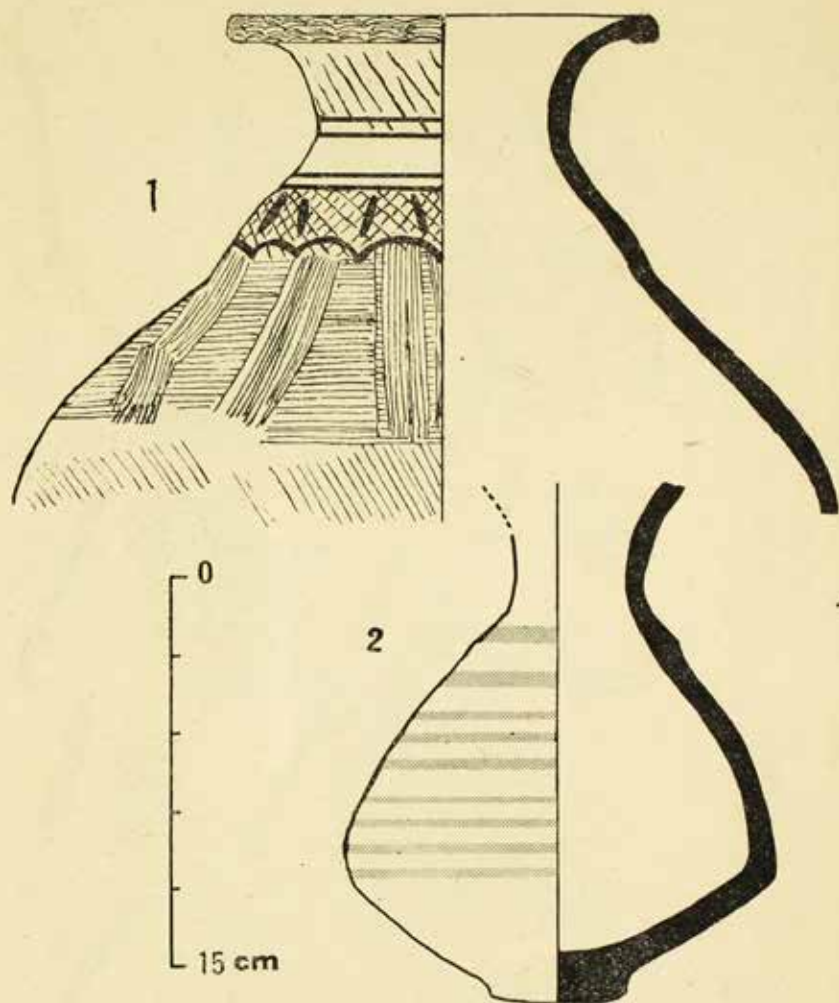
部に近く大形圧痕のある凸帯をめぐらしたものの(第10図1)、口縁部内角にきざみをもち頸部にするどい横線帯をもつもの(第10図2)、口縁部にはどこした縦位の凸帯上や口縁端に斜位の櫛描擬細文をもち、凸帯をはさんだ両側に櫛描流水文のあるもの(第10図3)などが見られる。さらにその胴部文様と考えられるものには、頸部に櫛



第11図 野崎遺跡出土・弥生式土器(二)

1(第六地点出土の第Ⅰ群土器)、2~7(第Ⅱ群土器)
8~13(第Ⅲ群土器)

描横線をほどこし、つづいて肩部に波文をめぐらすものが多いが、半割竹管による流水文・連弧文・または肩部まで施文してきた横線帯を縦位の押引文で区切っているもの(第10図4・10)、あるいは横線とともに横位の短線をもつものもみられ(第10図11) 縦文帯を櫛描線がかこみそのまわりを研磨していくという、変形磨消細文でか

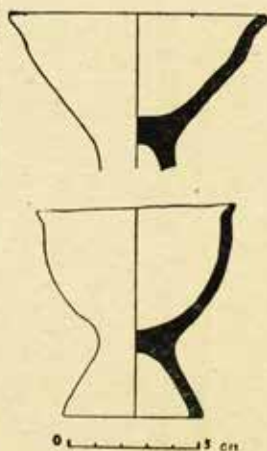


第12図 野崎遺跡出土・弥生式土器(三) 野崎23番地出土
1(第Ⅱ群土器)、2(第Ⅲ群土器)

ざられたもの(第10図13)もあつた。口縁部が厚くなり受口状と推定される壺形土器には、口縁部に押引文がほどこされ口縁部には大形庄痕のある凸帯をめぐらしている(第10図16)。また口縁内部におりかえされて、口縁部がやや厚くなつた無頸壺形土器(第10図17)もみられる。そして深鉢形土器にはすべて条痕がつけられており、同じく口縁部に押引文または横線をもつていても、ただちに縦位の羽状条痕をもつものと、まず横位の条痕帯をもち、縦位の羽状条痕がつづくものと二類あり、さらに口縁端が無文のものは断面がとがり気味となり単方向の斜条痕が多い(第10図33)三

類ともに口縁端に局部圧痕をもつものがある。第一地点のほかでも第一群の資料は数多く発見される。第三地点では条痕をもつた深鉢形土器とともに、縦位の刷毛目をうすくのこしその上にアナダラ属の貝殻を用いた浅い櫛目文を数段にわたつてほどこした壺形土器（第10図22・23）が出土し、第五地点では頸部に近く草の茎による流水文をもち胴部は条痕となる壺形土器（第10図28）がみられ、第六地点では口縁端に押引文をもち縦位の羽状条痕を施文した完形深鉢形土器（第11図1）が出土した。表面採集でも口縁部の圧痕のある凸帯につづいて条痕をもち口縁内部にも横線を施文した受口状の壺形土器（第10図21）や、半割竹管文・櫛描波文・櫛描横線文・篋または櫛を用いた浮線文風の文様（第10図24・27・29・30）、口縁端に押引文をもちきざみのある凸帯を口縁端にほどこした壺形土器（第10図31）がある。また深鉢形土器では口縁端に押引文をもち口縁部には横位・胴部には縦位羽状の条痕をほどこしたものの（第10図32）や、やや厚目で口縁内部にも施文のある波状口縁のもの（第10図34）、内面に沈線を一条めぐらした粗面無文の深鉢形土器がみられる。

第一群に属する土器は、早川源次郎氏により野崎二十三番地の一の土取りの時、採集保管されていた壺形土器（第12図1）で、その文様は開いた口縁部の口縁端に細密な櫛によるゆるやかな波文をめぐらし、頸部には上下二段にわたり二本づつの篋描沈線がある。上段の沈線より上部には口縁にむかつて、するどい篋によるはねあげをもっている。下段の沈線につづいてややせまい斜格文がほどこされており、その上から太い十八本の沈線で八の字形に区劃し、下端にはまた下むきの連弧文が十七本めぐらされておる。この斜格文帯に



第13図 野崎遺跡出土
弥生式土器（四）
第七地点出土

つづいて胴部は細密な櫛状器具による線を横位にほどこして後、下胴部に接するところは同一器具により左傾した線を施文している。また第八地点として私たちが発掘した地区からは、大きくわれた二個体の壺形土器が出土した。一つは上胴部に櫛描横線をめぐらし下胴部に接する部分には左傾した櫛描線の施文してある胴部文様の上に、六本づつ一組となった縦位のするどい篋描線がおろされ、その下端で四本づつ一組の篋描による大きな連弧文がうけとめておるもの（第11図7）である。他の例は口縁部から上胴部にいたる資料で、開いた口縁部が上方へおろし上げられた部分は櫛描波線を、頸部には上から下へはねおろした櫛描線をもち、その下は二条の沈線で区切られており、胴部には三条の沈線による波長の大きい波文がめぐらされ、それぞれの沈線の間にはアナダラ属の貝殻圧痕が施文され、下胴部につづくところは右傾する櫛描線を左側する篋描線できつた斜格文帯となつておる。その斜格文帯の上は一条、下は二条の沈線でくざられているもの（第11図2・16）である。

第一群にわけた土器は、発掘区から出土した壺形土器で、上胴部



第14図 野崎遺跡出土の須恵器

より細密な桶状器具による縦位の桶描線が数ヶ所おろされ、その下端において大きな連弧文がうけとめているもの(第11図10)で、その土器の肩部にはまた別の文様があるものと思われる。さらに表面採集

では、口縁部に鬚描波文をほどこし頸部にはわあげ線をもつたものや、縦位に細くするどい桶描線を密接してほどこして地文とし、横位に鬚描沈線できつたもの(第11図11・12)などがみとめられる。また早川源次郎氏が、第Ⅰ群の壺形土器のでた同じ番地から採集した壺形土器(第12図2)は横位の磨消刷痕をもつてかざられている。

長床式・寄道式・欠山式などに属する土器の量はいたつてわずかである。しかし長床式と考える土器片には明らかにも、痕跡がみとめられるも

の(図版第一)があり、野崎二十三番地の二よりは欠山式のひさご形壺形土器が出土し早川栄二郎氏が所蔵している。また加藤五茂助氏の採集された高塚形土器(第13図)は弥生式終末期のものである。須恵器 完形の長頸壺・埴・提瓶・杯をはじめ平安初期と考えられる骨壺(第14図)も発見されている。

その他、野崎遺跡では中世の内耳鍋もみとめられる。

野崎遺跡では以上のべたごとく、縄文早期より中世にいたる資料が出土しているのであるが、その主体はもちろん野崎遺跡第Ⅰ群にわけた土器であり、第Ⅰ群・第Ⅱ群の土器もまた多くみとめられる。野崎遺跡第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅲ群の土器についてさらにのべれば、それらの土器の移りかわりは次のようである。

野崎遺跡第Ⅰ群の土器 野崎遺跡で圧倒的に出土し第Ⅰ群としてわけた土器は、尾張平野で朝日式土器が成立し、その周辺の水神平式土器の文化圏へひろがっている時期の土器であり、この遺跡では尾張平野の朝日式系列のものと、この地域本来の伝統をうけついだ水神平式B類の土器が併出する状態である。資料の量や遺跡の数から考えて、この土器の時期が野崎遺跡でもつとも多量にみられる時期であろう。

野崎遺跡第Ⅱ群の土器 野崎遺跡第Ⅰ群の土器は、やがて第Ⅱ群の土器へ推移する。そしてこの野崎遺跡第Ⅱ群の土器の時期には知多半島において独立した文化圏が形づくられていた。野崎遺跡で第Ⅱ群にわけ、私たちが獅子懸式といっている土器に先行する時期で

ある。野崎遺跡二十三番地の一の壺形土器や第八地点の上層から出土した壺形土器の中にもみとめられ、瓜壺式土器と親縁関係をもつものが多い。

野崎遺跡第Ⅱ群の土器 私たちが獅子懸式といつてゐる型式の土器であり、第八地点の上層をはじめ、表面採集の資料の中にも一般的にみとめられ、尾張平野における外土居式土器をとまうのが普通である。

遺跡の点についても野崎遺跡において、多くの遺構がたてあなとして発見され、同一地点において層序をなした状態はほとんどみられなかつたが、このことは定住集落を否定するものではない。いわゆる砂丘地帯における遺跡と同じように、砂堆上の遺跡にあつては堆積物が安定せず、遺物層の上層が吹きとばされて、砂層の中へ深くえぐりこんだてあな部分のみがのこつたものにはかならない。このことは土器の型式の上からみると、第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅲ群と弥生文化の前期から中期への経続的な発展のあとがみとめられ、さらに後期になつても第八地点の例のごとく細長い溝状の遺構も存在するなど、安定した歴代遺跡であつたことを示しているいろいろな点があらずかれてくるわけである。

三、獅子懸遺跡

1

獅子懸遺跡のある獅子懸砂堆は、寺本・横須賀の谷のほぼ中央にあり、野崎遺跡や柳ヶ坪遺跡のある第一砂堆列から、約二百米西にはなれて平行する第二砂堆列である。地籍の上からは中央部の道路で、北獅子懸・南獅子懸の二小字にわけられている。そして遺跡の発見されている地域は、床さげによる土取りの進んだ南獅子懸の南端と、北獅子懸の北端である。野崎遺跡が土取り工事ではほとんど消滅してしまっているのに対し、獅子懸遺跡は南北の両端でわずかに知られているのみで、遺跡の大部分は未発掘のまま現在も残されており、将来の研究を期待される遺跡である。

私たちがこの遺跡を知つたのは、昭和二十八年に砂堆の南端にあたる南獅子懸の地区であつたが、その後の土取り工事の進捗により、この遺跡の中心資料は北獅子懸の地区でみとめられてきた。前節の野崎遺跡でのべたような調査の段階はこの遺跡でもいうことができず、すなわち

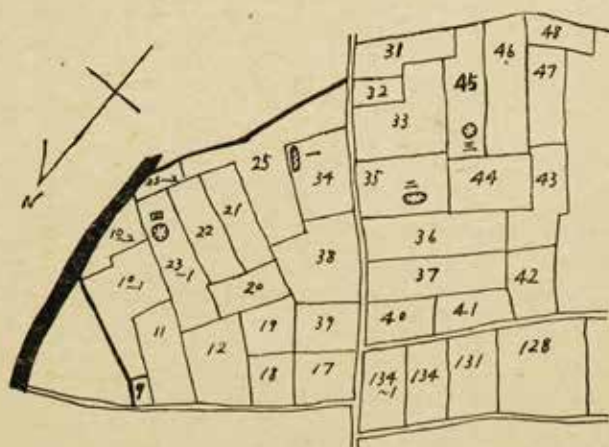
一、昭和二十八年から二十九年にかけて、土取りのすんだ地域から、表面採集によつて資料を採集していた時期である。

二、昭和三十年九月から十月にかけて床さげされた地域で、町史編纂委員会として工事にたちあひ、可能なかぎり工事の前に調査したもので、発掘に準ずる調査ができたものである。

一の時期に採集した資料は、南獅子懸の地区とおなじく床さげされた北獅子懸三十四番地で表面採集した資料であり、とくに北獅子懸の資料

は同一時期のものでまとまつていた。二に属する資料は確実に出土状態が知れるものであり、久野栄蔵・富田四郎・神谷昇の各氏が土取りをされた時に出土したものである。順序をなした遺跡とはちがいたで、あなを形成し、出土する遺物が同一時期にまとま

た。二に属する資料は確実に出土状態が知れるものであり、久野栄蔵・富田四郎・神谷昇の各氏が土取りをされた時に出土したものである。順序をなした遺跡とはちがいたで、あなを形成し、出土する遺物が同一時期にまとま



遺物採集地番と地主	地番	地点
神谷 昇	21	
同上	22	
同上	23の1	
浅井拾松	25	
富田四郎	31	
同上	32	
久野栄蔵	33	
富田四郎	34	
久野栄蔵	35	
富田四郎	45	
同上	46	

第15図 獅子懸遺跡・地籍と地点 (算用数字は地番漢数字は地点)
愛知県知多郡知多町八幡字北獅子懸 (南方地点はふくまない)

つていふことと相まつて、土砂の運搬を担当した朝鮮人の土工の人たちの協力により、多忙な工事中にもかかわらず學術調査と同様な成果をあげることができた。第二・第三・第四の三地点(第15図)がこれである。第一地点は最初に土取りのすんだ地区であるが黒褐色を呈した遺物包含層の底が床さげした部分に残つていたので、出土した遺物は同一文化期にまつた資料である。

2

獅子懸遺跡における各地点の調査状況をのべよう。

南方地点、南獅子懸の地区であり、現在のところ床さげのおわつていふ南獅子懸の二十八・二十九・三十番地の三枚の畑より資料が採集されている。ここではすでに地盤がさげられた面に土師器や須恵器のたてあなが三個所その底をのこしている。しかし表面採集の資料の中には、野崎遺跡でわけた第一群の土器や、弥生後期の穴山式土器もみとめられている。

第一地点 北獅子懸三十四番地の東北隅にあり、黄褐色砂層を黒褐色の遺物包含層がきりこんだ形であるが、床さげ工事により遺物包含層は北隣の畑との境界にそつてのこつていふにすぎない。そのため遺跡の構造についてはわからない。ここからは野崎遺跡でわけた第二群の土器のうち、条痕をもつた深鉢形の土器片(第18図17・18・19)が多くみとめられ、さらに完形に復原できた台付壺形土器(第17図4)が一個体発見された。

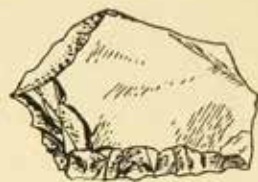
第二地点 北獅子懸三十五番地の中央部西よりにあたり、南北約二・五米の不整形をなしたたてあなが発見された。土取りの途中で

あるので調査に困難な条件が多かつたが、遺物は一片ものこらず採集することができた。土器は須恵器と土師器であり、土師器の方の量がやや多い。

第三地点 北獅子懸四十五番地の西北よりにみとめられた小規模のたてあなであり、出土した遺物は大きくわかれた十数片であるが、野崎遺跡第一群に属する深鉢形土器と壺形土器の二個体(第17図1・2)に接合できた。

第四地点 北獅子懸二十三番地の一のほぼ中央にあり、第二・第三地点のある畑と併行して土取りが進められていたが、発掘調査を計画した野崎遺跡の予察のために昭和三十年十月八日、野崎遺跡へいく途中を利用して獅子懸遺跡を踏査すると、運よく地主の神谷昇氏がこの地点を発見されていたものである。工事の予定をうかがうと一兩日のうちに完了とのことであるので、調査の援助にきていていただいた久永春男氏・町史編纂委員の伊藤芳彦氏とともに、とりあえず翌九日まですべての日程をこの地点に集中して、私たちのできる精一杯の努力をそいでみた。

遺跡は現地の地表面から三十層程は、東に水田となつていふ耕地を床下げした時の土がもりあげてあり、その下にかつての地表が存在している。約二十層の第一次表土層の下は海成砂層の堆積であるが、遺物層はここに黒褐色のたてあな状をなしてみとめられ、たてあなはまた一つではなくいくつもがきりあつた形であらわれ、その形は区々であり床面が赤くやけたものもある。床面の下をわずかにほり上げてみると、同じく海成の粗砂層であつても第二砂堆の特色となつていふ小礫の層がみとめられる。



第16図 獅子懸遺跡出土
の石匙（第一地点）
縮尺二分の一

3

獅子懸遺跡で出土した遺物は、石器と土器であり、土器は弥生式土器と須恵器・土師器・その他にわけられる。

石器 石匙が一個であり、第一地点において野崎遺跡第Ⅱ群の土器にもなつて出土したものである。打製で石材は硬砂岩をつかつている。（第16図）

弥生式土器 獅子懸遺跡出土の資料のうち大部分をしめるものは弥生式土器である。野崎遺跡と同じく弥生式の比較的新しい時期の土器である長床式・杵道式・欠山式もわずかに発見されているが、野崎遺跡でわけた第Ⅱ群・第Ⅲ群の土器が支配的である。

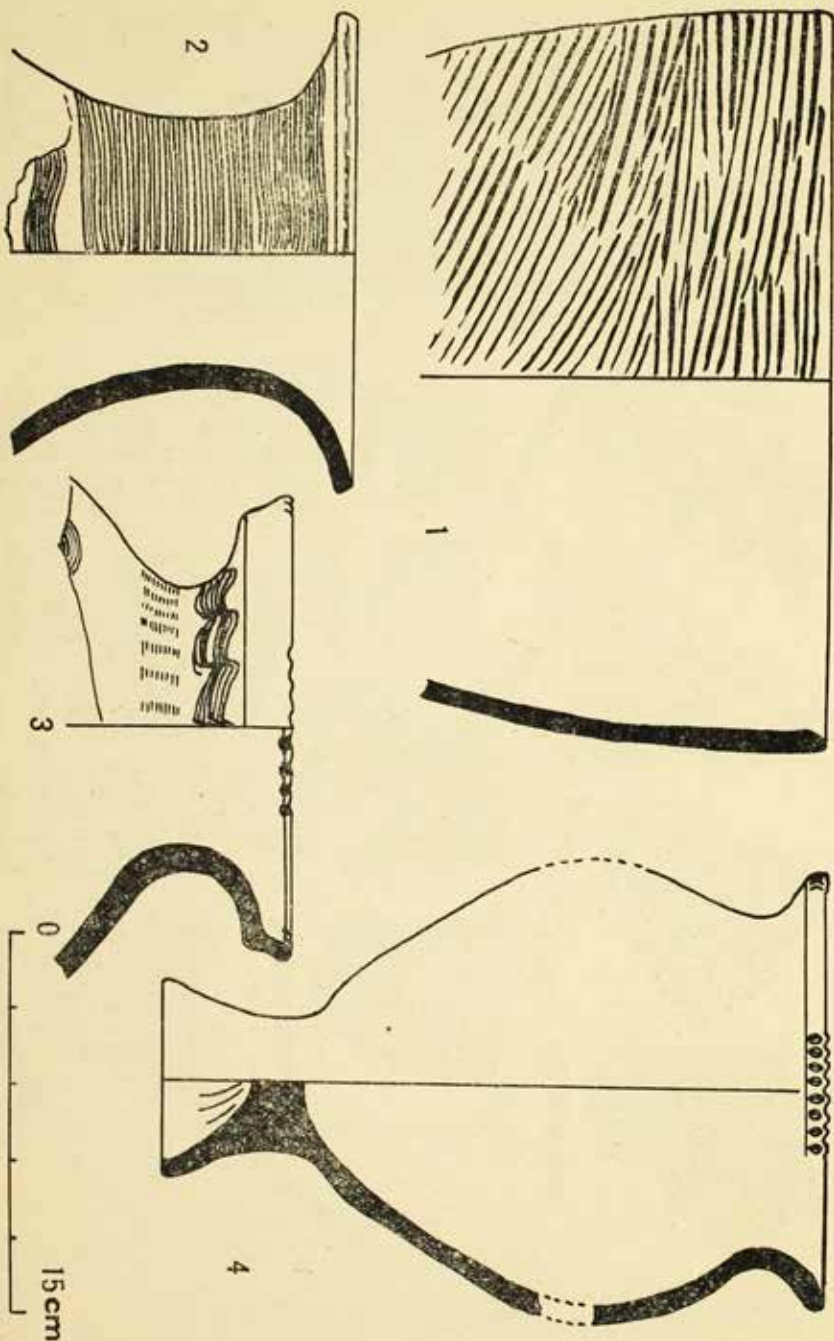
第Ⅰ群の土器も南方地点において少しはあるがみとめられ、楠橋による波線と横線帯の間に櫛による列点をもつた隆線のほどこされたものなど（第18図20・21）である。

第Ⅱ群の土器は第一地点と第三地点でみられる。第三地点では口径十八・五釐で一面に細密な櫛によるゆるやかな波線を文様として

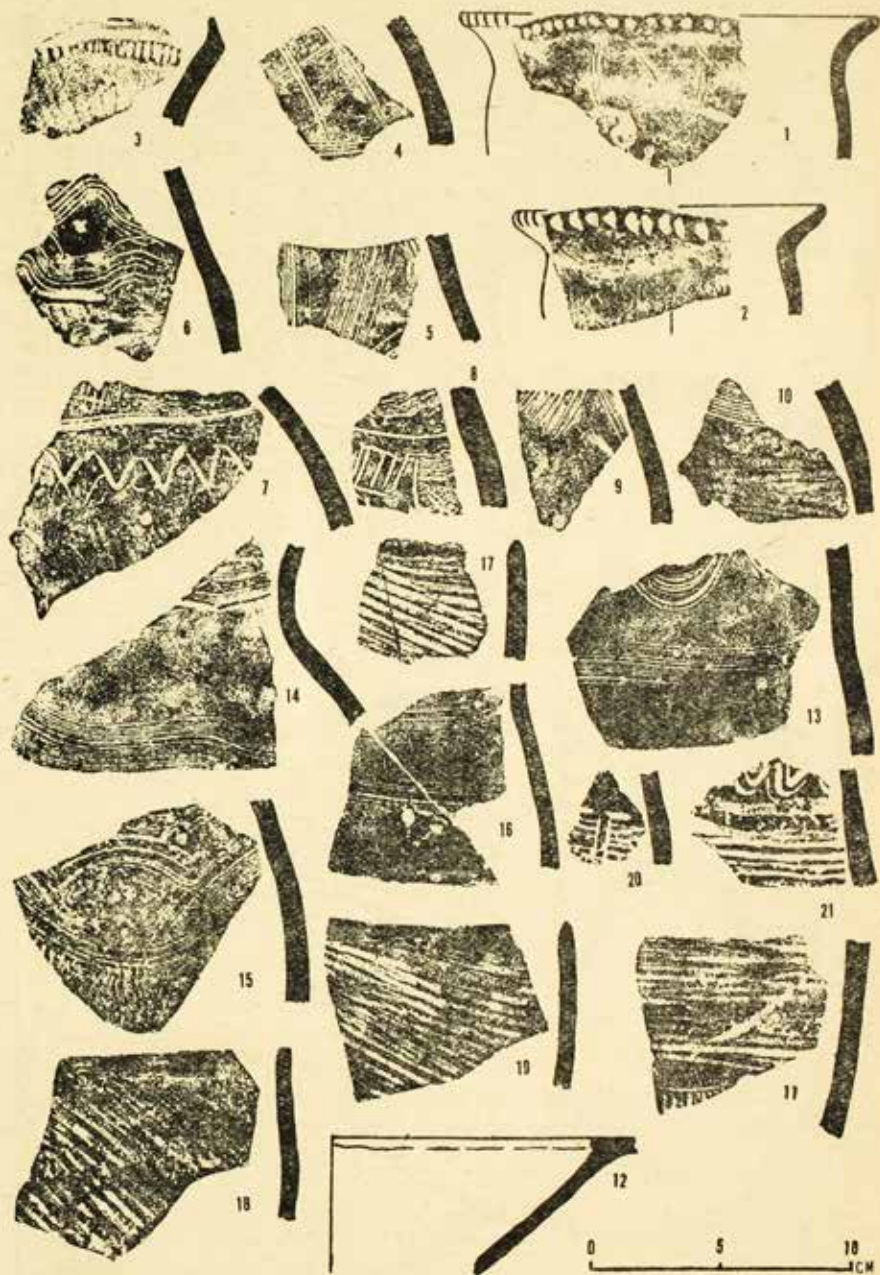
出土した遺物は野崎遺跡の第Ⅱ群としてわけた土器であり、第Ⅲ群の土器の遺跡としては、野崎・獅子懸両遺跡を通じて典型的な地点である。

もつている壺形土器（第17図2）のほか、口径二十八釐で器壁全体に条痕をもつ深鉢形土器（第17図1）があり、後者は口縁端に近く無文帯があつて条痕は単方向の斜位となり、さらに直向する口縁端に一個所圧痕がほどこされている。第一地点でも深鉢形土器は口縁端に近く無文帯があつてその下部に条痕がみとめられておる多くの土器片（第18図18・19）がみられたが、いずれも条痕は単方向の斜位であり羽状ではない。一個体完全に出土した台付壺形土器（第17図4）は、口径十六・七釐で口縁端に八個づつ連続した圧痕を四単位もつているほかは、胴部など無文であり器壁はやや厚手である。

第Ⅲ群の土器は第四地点でまとまつた資料がでており、この地点では固有の様相をもつて私たちが獅子懸式といつてゐる型式の土器が、外土居式の壺形土器をともなつてみられた。第四地点でみられる獅子懸式土器は、壺形土器と壺形土器・高塚形土器にわけられる。壺形土器には二類あり、口縁部が急角度に彎曲し口縁端に圧痕を連続してほどこしたものの（第18図1・2）と、もう一つは口縁に圧痕をもたず口縁部はやや彎曲したものである。数量は両者が相なかなばしており、どちらも櫛状器具による刷毛目はないものが多く、あつても顕著ではない。また脚台をもつものもたないものがある。壺形土器（第19図2）は大きく開いた口縁部の口縁端に六〜八個づつ連続圧痕を四単位もち、胴部には波長の大きな櫛描波文および櫛による押引文的な断続線をもつており、上胴部には櫛描の横線および波文を施文し、下腹部に接する部分の波文は波長がとくに長大であり、下腹部には文様がない。その他にも個体を別にした多くの土器



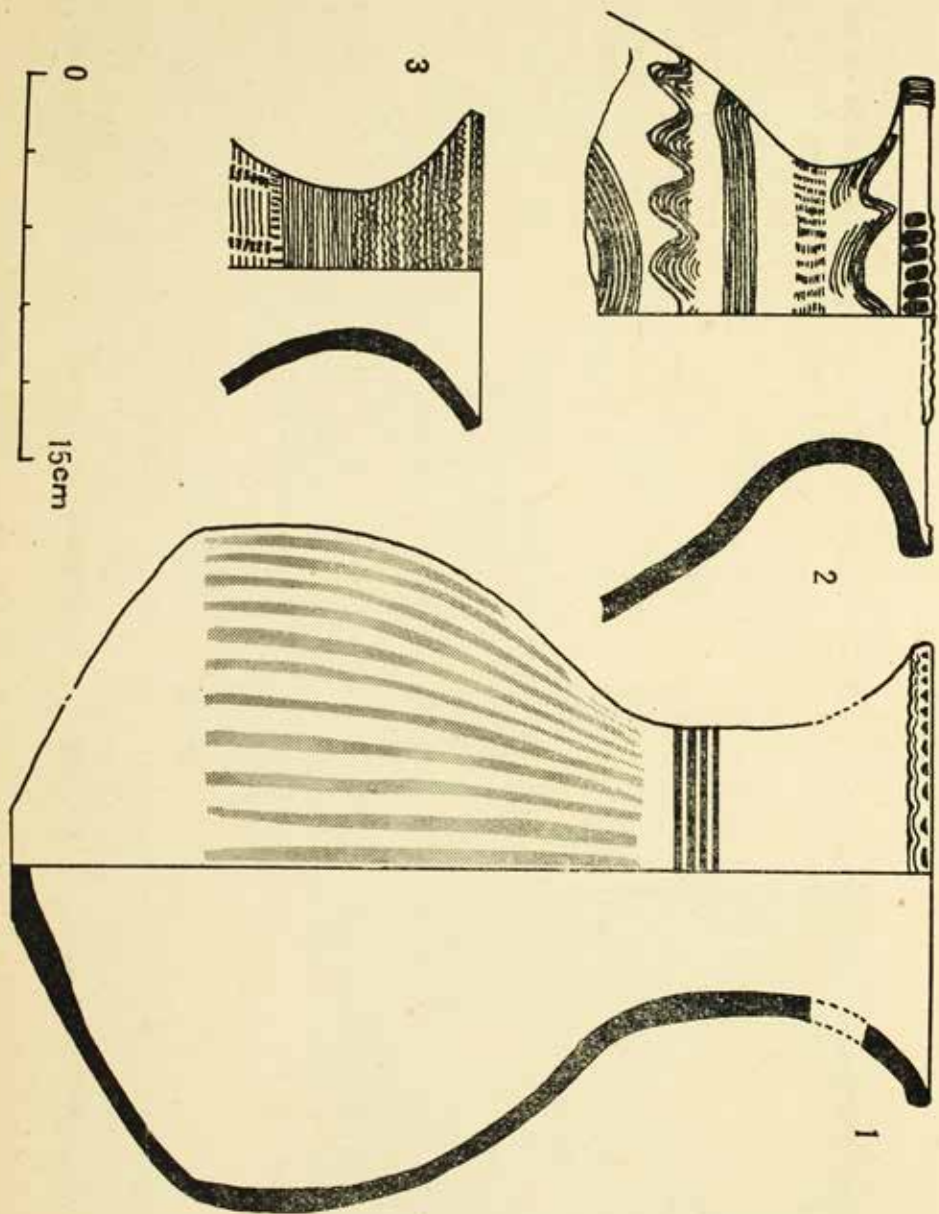
第17図 瀬子徳道跡出土・弥生式土器(一) 1・2(第三地点出土の第Ⅰ群土器)、4(第一地点出土の第Ⅰ群土器)、3(第Ⅲ群土器)



第18図 獅子懸遺跡出土の弥生式土器 (二)

1 ~ 12 (第四地点出土の第Ⅱ群土器)、13 ~ 16 (第Ⅲ群土器)

17 ~ 19 (第一地点出土の第Ⅱ群土器)、20・21 (南方地点出土の第Ⅰ群土器)



第19図 獅子經遊跡出土・弥生式土器(三)
 第四地点出土の第Ⅲ群土器

片(第18図3・10)がみとめられた。高塚形土器と推定されるものは、口縁端がつばのように外方におれひらいた塚状の口縁部破片(第18図12)と、塚部が充実して柱状をなした陶台部の破片でありいずれも研磨され塚部の内面までもみがかれている。一方の外土居式に属する壺形土器をみると、やや頸の細い器形で口縁端から頸部上半までこまかいさざ波状の櫛描波文を密接してめぐらし、頸部下半には櫛描横線をかきね、肩部と接する部分に櫛による縦位の庄痕列を一条ほどこしているもの(第19図3)で、上胴部は横位の櫛による庄痕を縦に数段にわたつてかさねた列により七区分し、その櫛による庄痕列を横位に櫛描沈線でないだ文様である。さらに他の例は口唇部の外端に庄痕をほどこし、頸部には櫛描横線を四条めぐらしたものの(第19図1)である。上胴部は半球形を呈し下腹部にいたつて急角度に稜をつくつておれており、上胴部は櫛状器具による斜めの刷毛目でしあげ、その上から縦位の磨消線すりけしを約一種の間隔でほどこした文様をもっている。

表面採集の土器の中には第Ⅰ群の獅子懸式に属するものが多い。加藤五茂助氏が三十二番地で採集した口縁部から胴部にいたる壺形土器(第17図3)は第四地点の資料と文様構成を同じくしており、口縁部のはしが上方へおりたつている点が変わつている。また三十四番地では細密な櫛目により曲直線をほどこされた数個体の土器片(第18図13・16)がみとめられる。

長床式・寄道式・欠山式の土器片は数量がわずかである。

須惠器・土師器 古墳時代の土器であるが、南方地点で和泉式ならびに鬼高式といわれる土師器の時期のたてあなが底を残している

ほか、蓋塚・塚・埴などの須惠器の破片が採集されている。第二地点はとくに両者が併出する時期のもので、須惠器では埴が一個体と蓋塚が六個体分出し、土師器は高塚形土器・壺形土器がみとめられた。土師器の方がやが多い。

獅子懸遺跡でもつとも多くみとめられる土器の時期は、野崎第一群の土器を主体にした野崎遺跡と、長床式土器を主体にもつた柳ヶ坪遺跡の時期の間である。すなわち野崎遺跡の第Ⅰ群・第Ⅱ群の土器が盛行した時期である。とりわけ野崎遺跡第Ⅱ群の土器は、この獅子懸遺跡第四地点を指標として、私たちが獅子懸式土器と称したもので、この地区においては尾張平野における外土居式の土器をともなつて出土するのが普通である。表面採集の資料では獅子懸式の資料が圧倒的であつたが、第四地点においては外土居式土器と相なばして出土している。そして第Ⅰ群の土器はそれに先行する時期のもので、第三地点の壺形土器などは尾張平野の貝田町式土器と親縁関係をもっているが、深鉢形土器・壺形土器とともに、これも知多半島を中心とした固有のものである。

そして野崎遺跡や柳ヶ坪遺跡が定住集落であつたように、獅子懸遺跡でも弥生前期から中期・後期古墳時代にいたるまで、各時期の土器が発見され、安定した歴史遺跡を示している。

しかも現在、獅子懸砂堆において資料の発見されている地点は、砂堆の北端と南端にかざられており、将来の研究が期待される遺跡である。

四、下内橋遺跡

獅子懸砂堆を彎曲の頂点にもつた第二砂堆列は、中島・上平井につゞいていく過程において、堀之内の天王山・伝兵衛山からのびた尾張夾炭層の岩盤が地下の浅い所にあり、ときにはその露頭があらわれているため、下内橋砂堆の地点でさらに節度をもつてまがつてゐることは、前章でのべたごとくであるが、下内橋遺跡はこの下内橋砂堆の上にある。

この砂堆は南の約二分の一が町立の隔離病舎となつてゐるので、その区域の調査は不可能であるが、遺跡は相当以前から平松五三郎氏により注目されてゐた。さらに昭和二十九年と三十年におこなわれた二回の土取り工事により、たがいなことなつた年代の遺跡が多かつたであらうとなつてあらわれてきた。

すなわち、平松氏によつて土玉を多く採集されてゐた第一地点は、中央部から切られて小規模の貝塚が断面を露出してゐた。さらに近藤高次郎氏所有の畑（下内橋三十五番地）を床さげされたおり、工事にたちあひ調査の便宜をあたえられたが、第20図に示すような完形の土師器の出土した第二地点をはじめ、山塚・山皿の出土した第三・第四地点も確認された。

第一地点 ハマグリを主とした小規模の貝塚であり、下内橋三十六番地と三十九番地の境界にまたがり、長さ約三米・厚さ約四十五厘の貝層断面があらわれているが、遺跡は不整形である。土玉・内耳綱とともに陶質の破片をだしてゐる。中世も後半になつたころであろうか、山塚・山皿の類はみられない。

第二地点 土師

器のみが三個体出土したたであらう。出土した高塚形土器・壺形土器（第20図）は土師器の型式の上で、和泉式土器といわれる比較的古い時期のものである。

とくに高塚形土器は、杯部と脚部が別々につくられ、その杯部はまた、口縁部と底部とにわけてつくられており接合部分は稜をなして、この時期の特徴をしめしている。脚部は裾でひろがり、杯部のつけ根にははめこみ式のへそがはつきりとみられる。壺形土器は小形で口縁部が外反し、こまかい刷毛で整形したあとがみられる。

さらに一個体は、表面に凸帯があり、あるいは縦位・横位の刷痕をもつ厚手の丹塗り土器（第21図）であるが、壺形ハニワの頸部にあたる部分と類似してゐる。壺形ハニワの破片とすれば、この地域は



第20図 下内橋遺跡出土の土師器（一） 第二地点出土



第21図 下内橋遺跡出土の土師器(二)
第二地点出土の壺形ハニワ類似の土器
(縮尺三分の一)

もちろん知多半島にはハニワをもつ古墳が、今まで知られておらず新しい問題を投げかけている資料である。

第三地点 小さい土壇^{どころ}であり、山塚が五個体発見され、うち二個は完形にちかい。口径はともに約十五厘米をはかり、口縁部はすでに直線化している。そして高台も、一個は低くつぶされた断面三角形の高台がつけられているが、他の例は高台が略されている。久永春男・田中稔の兩氏がいう(すえつき・「日本考古学講座6」所収、山塚山皿・「横須賀の遺跡」所収)すえつき第三期後半で

鎌倉時代から次の時代におよぶものと考ええる。

第四地点 細長い溝状の遺構をもち、その大部分は畑の境界となつている断面からうかがえる。山皿が一個出土したが、口径九・五厘米で丁寧に仕上げられており、たけの高い断面が三角形のつけられている。すえつき第三期前半のもので平安時代後期につかわれたものであろう。

第三章 八幡のむらのうつり変り

一、縄文文化

日本列島における最初の人類の文化は、縄文文化であると長い間いわれてきた。しかし終戦後の学問の発展は、関東や中部・東北・北海道などの山岳地帯で縄文文化以前の、いまだ土器をしない時代の文化を裏づけてきた。けれども知多半島ではこの時代の文化はいまだ発見されておらず、この地域の文化は現在知られている限りでは縄文文化よりはじまっているのである。

その縄文文化は、全体の長さをほゞ四・五千年といわれ、さらに早期・前期・中期・後期・晩期の五つの時期に区分されている。そして知多半島では、縄文文化の早期から遺跡が発見されており、東浦町緒川の入海貝塚・師崎町大井の入道遺跡などがその遺跡であるが、私たちの町にはこの時期に属するまともな遺跡はみとめられていない。

早期につづいた前期になると、今度の合併で同じく知多町となつた地域で旭町（現・知多町）南粕谷の森西貝塚がある。大野谷にのぞんだ南粕谷台地の南西角にあり、貝塚はほとんどすべてハイガイによつて形成されている。出土する土器は羽状縄文・貝殻文・細隆起文などでかざられるのが大部分であり、量は少ないがせんい痕をのこしている土器もでて、縄文前期の初頭にあたる遺跡である。

縄文の早期・前期から中期にいたる遺跡は、すべて台地の端や斜

面に位置しており、これらの時期が海侵期にあたり、現在の沖積低地が浅い海底をなしていたことを示している。前述した森西貝塚の前面にひろがっている大野谷の地表を約一米五十釐もはいていくと、貝塚の貝とおなじハイガイを多くふくんだ海成粗砂層があらわれる（註1）ことからもうなずかれる。さらに寺本の野崎砂堆に堆積している海成粗砂層の中に、縄文早期や中期の土器片（註2）がふくまれていたことでもうかがえるが、一方この資料は、かつて寺本の低地が陸化される前の時代に、低地をとりまく丘陵のどこかに縄文早期や中期の遺跡があつたではなからうか、すでに消滅してしまつたか、未発見であるかはわからないが、ともあれそうした時期の住民の存在を考へることを可能とするものである。縄文中期に属する遺跡は、野崎遺跡におけるこの資料のほかには、知多半島全体としても現在のところほかに例が報告されておらず、この地域の近くでもとめれば刈谷台地にこの時期の遺跡（註3）が知られている。

さらに後期・晩期にいたると、森西貝塚のある南粕谷台地と谷を一つへだて大草台地に、旭町（現・知多町）大草の東畑貝塚が知られており、宮本秀吉氏・安村忍澄氏によつて採集された同遺跡の資料の中には縄文後期の堀之内式に相当するものも多くみとめられ、地点を別にして私たちが昭和二十三年から二十四年にかけて発掘した調査では基盤にそつて後期後葉の資料を、さらに混土貝層・純貝層・混貝土層と上層になるにしたがい、晩期の資料を検出してきた。一方、この晩期における八幡町の遺跡としては、前章にのべた新知の西屋敷貝塚がこれであり、東畑貝塚の主体をなしている新しい部分の資料の直後であり、晩期中葉の遺跡である。

第一章で指摘したように、この時期における海岸線の変動が、東畑貝塚のある大野谷では、いまだ縄文前期の森西貝塚があつた時期のような海侵の状態をつづけていたことが、東畑貝塚がすべて海岸の貝でありながら、大野谷という内湾に面して形成されていることによりわかる。そしてそれを同じくしたころ八幡町の地域、ことに朝倉・古見の谷においては、浅海底となつていた低地は陸化しおわり、すでに現在の海岸線が安定した状態であつた。西屋敷貝塚の立地が現在の海岸線をなしている比高約四米の砂堆上にあることから実証される。西屋敷貝塚の調査では遺跡が黒泥土で示される低湿地にそつていたことがわかる、縄文晩期中葉の西屋敷貝塚の時代に、弥生文化の時代と同様な地形に遺跡が形成されていることは、西屋敷貝塚の特色であるが、現在そうした課題を中心として発掘ならびに周辺の試錐調査を計画している、それについての考察は報告をあらためてのべよう。

二、弥生文化

西屋敷貝塚でみられるごとく、この地域の祖先たちは狩猟生活の時代に、すでに低地へおりて海岸砂堆の内側に集落をつくつていた。狩猟時代のおわりにそうした低地を集落の位置にもつということは、水田農耕の技術が日本へ移入されて、新文化の影響が東海地方へおよんできた時、台地の上から水田をもとめて新しく低地へ移住しなれても、そのままの位置で新文化をうけいれることが可能な発展の素地(註4)となり、次の段階では他の地域にさきかけて初期農業の一拠点として栄えてきたのである。

新しくひろまつた水田農耕を特色とした弥生文化は、さらに前期・中期・後期の三時期にわけて考えられ、その各時期を通じて使用された弥生式土器はまた、器形や文様の変化を目しるしとして、いくつかの型式に区分されて研究がすすめられている(第22図)。西日本に伝来した最初の弥生文化が、尾張平野の西志賀や清州の低湿地につたわつて、いわゆる遠賀川式土器の文化圏をつくつていた時、尾張平野の周辺では縄文文化の終末期である水神平式土器の文化がみられた。知多半島では現在、水神平式の系列にある土器は知られているが、その中の遠賀川式土器の波及は未発見のままである。そして水神平式土器が弥生文化の影響を大きくうけて水神平式B類となり、野崎遺跡で第一群としてわけた土器の時期に、この地域の野崎・獅子懸の両遺跡をはじめとして、半田市岩滑の中郷遺跡(註5)や南知多における師崎町ハザマ遺跡(註6)が知られ、弥生式土器の地域圏が知多半島まで拡大されてきたことを示している。これら知多半島における弥生式初期の遺跡の中では、おなじく野崎遺跡第一群の土器の時期といつても、中郷・ハザマの両遺跡がまず生まれ、野崎・獅子懸遺跡がつづいたものと考えられる。この時期の土器の型式的比較は、地域差が年代差にとりちがえらるる可能性が多くみられ、資料の検討には困難な点が多いが、中郷遺跡の土器には野崎遺跡にまじらない遠賀川式系統の壘形土器がよくまれ、あるいは水神平式B類の土器で口縁部の肥厚した無頸の壘形土器が、中郷・ハザマの両遺跡ともに盛行しているなど、野崎・獅子懸の両遺跡にたいして地域差というよりは時期的に先行していると考ええるべきであらう。

弥生文化	尾 張	知 多 半 島	三 河
前 期	遠賀川式		水神平式
	朝日式	野崎Ⅰ	水神平式B類
中 期	貝田町式	野崎Ⅱ	瓜郷式
	外土居式	野崎Ⅱ(獅子懸式)	下長山式
	長床式	長床式	長床式
後 期	寄道式	寄道式	寄道式
	欠山式	欠山式(柳ヶ坪型)	欠山式

第22図 知多半島を中心とした弥生式土器の編年表
前期・中期・後期という区分は、相対的なものであつて、知多半島の場合、最初に水田農耕のあらわれてきた野崎第Ⅰ群の段階までを前期として編年した。

的に出土し獅子懸遺跡でも南方地点でみとめられて、野崎遺跡の第Ⅰ群に分類したこの地域の土器は、尾張平野に多くみられる朝日式土器(註8)との間に、共通する多くの特徴をもちながら、具体的にはまた縄文文化末期に発達した要素などこまかい差異をみとめている。こうしてこれらの遺跡の土器を、地域差・遺跡差に重きをおいて考えるならば、これを野崎式と称して一型式を設定していくこ

久永春男氏が東海地方における弥生式土器の型式を研究して「朝日式土器成立の過程は、その周囲をとりかこむ水神平式土器文化圏にたいして波紋のひろがるような形で影響を及ぼした。」(註7)とい

とも可能である。しかしこのように各地域・各遺跡に型式名を無限につけていくことは、事態をいたずらに混乱におとしめ理解を困難にするのみである。とくにこの場合、野崎遺跡でつけた野崎第Ⅰ群の土器は、朝日式土器より編年的に古いというよりは、地域差による変相と考えるべきであろう。そしてやはり土器型式を土器の共通性に重きをおいた概括と考えて、これらの土器も広義の朝日式土器の地域型の一つとみなしていくのが妥当と考える。

次の時期に、尾張の木曾川下流の湿地や名古屋台地で貝田町式土器が、三河の豊川下流では瓜郷式土器が成立した時、知多半島においては独立した別型式の土器が存在した。野崎遺跡において獅子懸式に先行する野崎第Ⅰ群の土器の時期である。(第22図)野崎第八地点の上層からもみとめられ、同じく野崎二十三番地出土の壺形土器は完形に近いものであり、獅子懸遺跡では第三地点の壺形土器や深鉢形土器がこれである。これらの資料は前者が瓜郷式土器に後者が貝田町式土器に近い様式をもっているが、やはり固有の要素として考えるものである。

尾張・三河で貝田町式から外土居式へ、瓜郷式から下長山式へ推移する時に、知多半島においてもそれに対応して、野崎第Ⅰ群の土器から第Ⅱ群の土器に移行して獅子懸式土器が成立した。獅子懸遺跡第四地点の土器を標式として、野崎・獅子懸の両遺跡をはじめ柳ヶ坪遺跡でもその資料がみとめられ、知多半島ではこの地域のはかに南知多でも発見される(註9)。さらに西三河に分布がひろがっており、名古屋の熱田・瑞穂の両台地の遺跡では、外土居式土器を主としてそれに伴存している(註10)。獅子懸遺跡第四地点では獅子懸

式と外土居式の両者が相なればして発見された。

野崎第Ⅰ群の土器から獅子懸式土器にいたる時期では、文化圏がこまかくわかれて尾張と三河で土器型式がことなるように、知多半島においても独立した地域圏を形づくっていたのであるが、それにつづいた段階ではこれらの地域がすべて尾張で成立した長床式土器によつて統一された。この地域では横須賀町の榎ヶ坪遺跡（註11）がこの時期であり、長床式土器とともに獅子懸式の推移した長床式乙類の土器が伴存している。

知多半島における弥生文化の前期から中期にいたる遺跡の分布は、南知多におけるわずかな例をのぞいて、現在のところ寺本・横須賀につづく沖積低地でみとめられているのみである。いゝかえれば野崎遺跡・獅子懸遺跡・榎ヶ坪遺跡は、知多半島の弥生文化でそれぞれの時期における代表的な遺跡である。

さて長床式の時期につづいて、弥生後期の寄道式・欠山式のころになると、知多半島の谷のところに遺跡があらわれるが規模は一般に小さい。寺本の谷における信濃川南岸の西川向遺跡、堀切遺跡、中島遺跡、石ヶ脇遺跡などがこれであり、横須賀の地域をはじめ常滑・西浦の谷、大野谷、大府・東浦の谷、阿久比谷から南知多にも発見されている。寺本・横須賀の谷のように沖積低地全体が水田として利用できるように地域にかきらず、陸化のおそい谷など条件のわるい谷であつても寺本における石ヶ脇遺跡のごとく、侵蝕谷がさらに丘陵をけずつた支谷が、小規模の谷頭水田の場として利用されてきたものである。このことは平安期にいたるまで確實に海が入りこんでいたと考えられる大野谷の南粕谷台地の一部に、寄道

式土器を出土する小遺跡がみとめられることからもうなずかれる。さらに朝倉の大廻間遺跡の例は丘陵の上に独立してたてあなが発見されたものである。

三、古墳文化

水田農耕を生活の基礎にした弥生文化の発展は、生産の余剰による富の蓄積を可能にしてきて、やがて部落の内部に身分の差をもうみだしてきた。すでに弥生文化後期になると、日本の国のもとになるようないくつかの国ができあがつたと考えられている。

そうして西暦三・四世紀のころになると、身分の高い豪族の権威をあらわす一つの象徴として、大規模な墓が残されてきた。それがすなわち古墳である。古墳文化は埋葬されている遺物とともに内部構造・外部施設をもとにして、前期・中期・後期と三区に分かれており、各時期の古墳はまたそれぞれの時代によりその社会的な位置や意味を異にしている。古墳文化の変遷は時期による差異とともに、一方では地域による変化にも大きく特色づけられている。

いま知多半島における古式の古墳をみると、その出土した石製模造品などにより、前期末の古墳と考えられている上野町名和字欠下のカプト山古墳が知られているのみであり、また古墳の形の上では東海岸阿久比谷において宮津の二子塚古墳が前方後円墳であり、その東南にあつた半田市乙川の天王西古墳がかつて前方後円墳であつた以外は、発見されているほとんどすべての古墳が後期の円墳である。八幡町の中で知られている古墳は、寺本の岩之脇・新知の榎といずれも後期古墳に属しており、それぞれ単独に発見されていて、

いわゆる古墳群をなしていない。もちろん、北に隣した横須賀町妻父の釈迦堂古墳のごとく、組合せ石棺をもつたような小さい古墳が砂堆の上にあつたように、私たちの町の古墳が平地に立地しておれば、現在それらの砂堆の上を街道がとおり住宅地となつていて関係から、多く破壊されて消滅しきつたことが想像されるが、そのことを考慮にいれてもその数はすくない。

知多半島の丘陵が比較的侵蝕をうけやすい第三紀の新層であり、洪水のたびに土砂が耕地にはいつて水田が安定しなかつたことが、弥生時代の前期・中期に大きな繁栄をみながら、生産の規模が拡大されてきた弥生後期になると、遺跡が歴史遺跡として確立してないことにあらわれるなど、ひきつゞいた古墳時代の前期・中期にも、生産力の発展が特定の人をまつる古墳をきつく程には充実しておらず、したがって部落の内部には先進地域にみえるような、支配し支配されるという階級関係はいまだ成立していなかつたと想像される。そうして古墳の築造がきわだつた貴族にかぎられていた前期・中期をすぎて、古墳にまつられる人の性格が変化し、家長的体制のもとに数と分布がはげしく拡大された後期になつて、ようやく海岸にそつた沖積低地に多くみとめられるようになつたものである。

さらに、この時代の集落址では下内橋遺跡の第二地点の出土品のうち、高塚形土器・甕形土器と併出した壺形ハニワとおもわれる数片は注目されるべきものである。前述のようにこの地域には古式の古墳はみられず、とくにハニワをもつた古墳は知多半島には一基もなく、この近くでこれをもとめれば名古屋台地までいなくなつてはならない。また後期の古墳でみられるような須恵器を出土する遺跡



第23図 法海寺出土の軒丸瓦

は砂堆の上に数多く、獅子懸遺跡第二地点をはじめ八幡神社遺跡群・野崎遺跡などはその例である。

野崎遺跡では古墳時代の須恵器とともに平安朝までくだるとおもわれる骨壺が出土した。奈良・平安時代になるとこの地域は、寺本村といわれた近世の村名のよりどころと推定される薬王山法海寺で代表されてきた。

旧寺域よりは今も布目瓦が多く採集されており、とくに浜岡佐一郎氏により発見された変種蓮花文の軒丸瓦(第23図)は、石田茂作博士により平安時代初頭の資料と編年せられて、古代における法海寺の繁栄をうらづけている。

さらにこの時代はまた海岸汀線に近く、角形土製品を目じるしとした漁村集落がさかえたころでもあり、遺跡は須恵器やほかの土師器とともに併存した形で、横須賀の海岸から寺本の第三砂堆上につづいている。

一方、平安末期より鎌倉時代にかけて、知多半島の丘陵には第三紀の尾張夾炭層の粘土を材料とした製陶が発展し大古窯群を形成する。私たちの町においても、八幡新田をはじめ、佐布里・新知の谷の奥の丘陵部には、数十基の古窯群が存在し、かつての隆昌をしのばせているが、それについての報告は法海寺や角形土製品の研究と

ともに別の機会にゆずらう。

註

- ① 一九五四年二月名古屋大学井関弘太郎氏の指導をうけて、ハ
ンドオーガーによる大野谷の試掘をおこなった時の資料であ
る。
- ② 第二章第二節「野崎遺跡」参照
- ③ 加藤岩蔵「山之神遺跡と天子神社貝塚」(刈谷市文化財保護
委員会一九五六)
- ④ 井関弘太郎「日本の初期農業集落の立地に関する若干の問題」
(名古屋大学文学部研究論集Ⅱ所収一九五三)
- ⑤ 立松宏「岩滑遺跡について」(水神平式土器文化資料編Ⅱ所
収一九五五)
- ⑥ 久永春男「師崎町ハザマ遺跡」(水神平式土器文化資料編Ⅰ
所収一九五四)
- ⑦ 久永春男「尾張三河遠江における弥生式土器の諸型式とその
地域圏」(日本考古学協会第十六回総会研究発表要旨)
- ⑧ 久永春男「東海地域の弥生式土器」(日本考古学講座4所収)
- ⑨ 大盤賢雄「愛知県知多郡豊浜町発見の遺跡遺物」(考古学雑
誌22の5)
- ⑩ 田中稔「高蔵貝塚」(豊橋市瓜郷遺跡調査会一九五四)
- ⑪ 杉崎章「柳ヶ坪貝塚」(愛知県知多郡横須賀中学校一九五三)
・「横須賀の遺跡」(愛知県知多郡横須賀町史編纂委員会一九
五六)

跋

獅子懸式土器について

一九五一年の秋であつた。杉崎章君から知多郡横須賀町の柳ヶ坪貝塚で採集したという土器片を示された。それは長床式乙類と私の仮称している甕形土器の破片で、三河では長床式土器にもなつて出土するが、文様や土器の焼成に異質的なところがあり、隣接地域圏の土器ではなからうかとかねて考えていたものであつた。そのころ熱田の高蔵貝塚B地点（外土居町一二番地）で土取工事によつて貝田町式土器から長床式土器にいたる歴代遺構があらわれ、田中稔君の調査（註1）により、貝田町式土器から長床式土器への移行の中間になお一型式（外土居式）を定立すべきであること、高蔵貝塚の長床式土器と東三河のそれとの間にはわずかながら地域差が見られること、高蔵貝塚の長床式土器にも乙類の伴存がみとめられることがわかつた。そこでこの長床式乙類が土器の主体をなす地域圏（文化圏）は、知多半島あるいは海を隔てた伊勢なのではなからうかと思いをめぐらしていたときであつた。

翌年の春三月、ひとむかしぶり西知多の砂堆地域を歩いた。そして六月、池上年氏とともに柳ヶ坪貝塚を発掘した（註2）。ところが目標とした貝塚は中世のものであり、弥生式土器はその下層の褐色有機土層中に包含せられること、歴代遺跡であつて外土居期から欠山期まで存することが明らかとなつたが、そのうち最も多量に

発見せられたのは典型的な長床式土器で、乙類はやはりそれに伴存のかたちであつた。では長床式乙類の文化圏は伊勢に求めるほかないのであろうか。

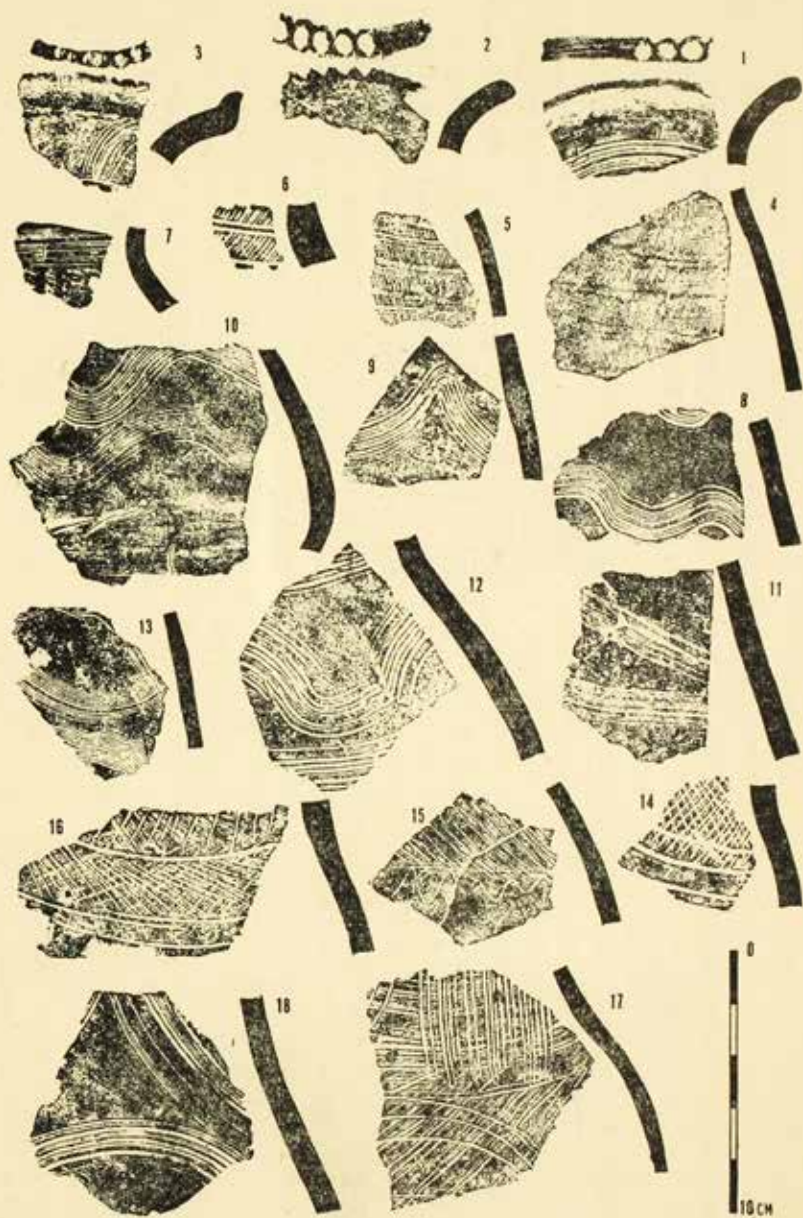
ちようどその秋、豊橋市の瓜郷遺跡の第五回の掘調査のうちに、竪穴群の一から、下長山式土器を主体として、少量の外土居式土器とともに長床式乙類に類する土器が伴出するのを、そして長床式土器は一片すらともなわないのをみとめた（第24図参照）。

ついで翌年北設楽郡振草村大字下粟代の黒内遺跡で長床式乙類類似的甕形土器が水神平式B類系統の細条痕をほどこした甕形土器に伴出する例が、北設楽郡史編纂委員会によつて追加せられた。

今まで長床式乙類として概括して来た土器が、長床式土器に先行する年代のより古い土器に伴出するものと、長床式土器に伴出するものに、型式が細別されなければならなくなり、それがむしろ主体をなす地域圏の発見はいよいよせかれた。

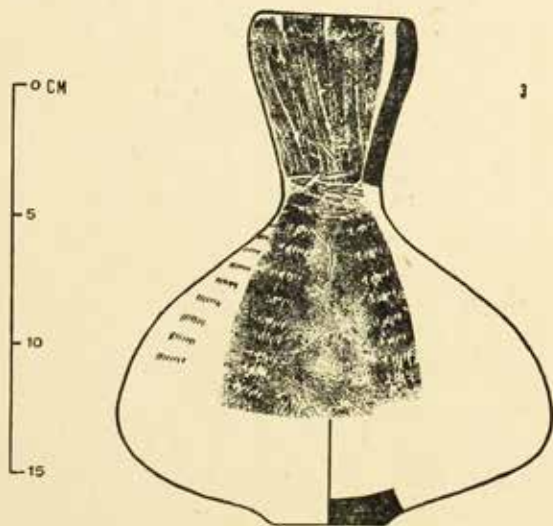
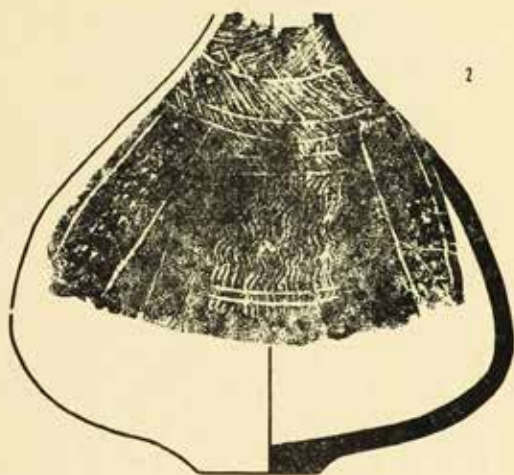
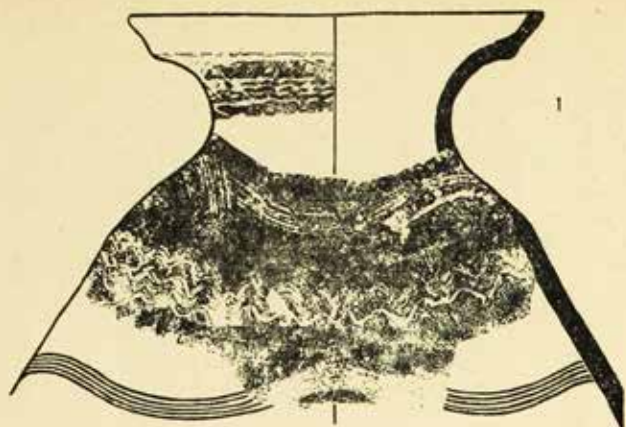
そこへ八幡町の字野崎から字北獅子懸にいたる遺跡群が発見せられたのであつた。北風の冷たい夕ぐれ、砂の飛ぶ砂堆を、杉崎章・田中稔両君と三人で土器片の分布を追つて北獅子懸にたどりついた時、私がかつたまま西の畑の崖面に露出している小竪穴の断面からひきぬいた土器片が、それまで字野崎地内で採集した土器がすべて水神平式B類系統（野崎第1群土器）であつたのに、それだけが細密な桶描き曲線の施された長床式乙類に類似する土器（野崎第2群土器）であつたのをおぼえている。

それから一年、八幡の砂堆地域ととりくんでの杉崎章君のひたむきな精進がおこなわれた。採集資料の増加につれて、野崎第1群土



第24図 豊橋市瓜郷遺跡出土の野崎第Ⅱ群・第Ⅲ群類似土器

第25圖 愛知県碧海郡知立町知立神社附近出土弥生式土器(知立神社蔵)



器と第Ⅱ群土器のほかに瓜郷式土器に類似した第Ⅰ群土器が存すること、第Ⅱ群土器は長床式土器を伴わずに独立して出土することがわかった。ようやく「長床式乙類が土器の主体をなす地域圏」の存在という予想が実現したのである。振草谷の黒内遺跡の土器と対比しつつ、野崎第Ⅱ群土器に獅子懸式土器という型式名をつけたのは一九五五年の晩夏であつた(註3)。

その秋十月、八幡町史編纂委員会によつて野崎遺跡の発掘が企画され、その予察におもむいたところ、ゆくりなくも獅子懸遺跡の一点で土取工事がおこなわれ、土器がぞくぞく出土しつつあるのに遭遇した(註4)。削り残されていた住居址の一角および小竅穴群から、二日がかかりで、壺形・甕形・高塚形からなる獅子懸式土器のLurelをとり出すことができたが、その壺形土器のなかば近くまでが外土居式の壺形土器そのものであつた。獅子懸式と外土居式との年代的並行およびその密接な交渉があらかとなつた。

野崎遺跡の発掘をおこなつたのは年の暮であつた。溝状遺構がいくすじもあらわれ、その溝内やむかしの地表から採集された土器は大部分が野崎第Ⅱ群土器であつて、瓜郷式土器の地域型ともいふべきその様相があらかとなつた。

野崎第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器すなわち獅子懸式土器との年代順を示すところの、両文化層が層序をなす実例は、獅子懸遺跡においても野崎遺跡においても見出すことができなかった。しかし獅子懸式土器に外土居式土器が伴出するという事実から、外土居式土器を媒介として、獅子懸式土器の相対年代がわり出される。高蔵貝塚E地点において貝田町式土器が外土居式土器に先行することが溝状遺構

内の包含層の層序によつて実証(註1)せられており、瓜郷遺跡においては竅穴の層序によつて瓜郷式土器が下長山式土器に先行することが実証せられている。そして下長山式土器と外土居式土器および獅子懸式にそつくりの土器片とが伴出している例(第24図参照)もある。

すなわち知多半島の獅子懸式土器は、海をへだててその当時は半島のすがたであつた熱田の外土居式土器、また三河の豊川流域の下長山式土器と年代が並行しておこなわれた土器である。そして瓜郷式土器と器形および文様の構成に共通するところの多い壺形土器と水神平式系統の条痕文をなお残す甕形土器から成る野崎第Ⅱ群土器は、その型式からおして瓜郷式土器および貝田町式土器と年代を並行しておこなわれ、獅子懸式土器に先行した土器型式と考えてよいであらう。

獅子懸式土器の地域圏がどのような範囲にわたるかについては、現在私たちはまだ知るところをわめてわずかである。衣ヶ浦をへだてて知多半島と相対する碧海台地においては、いまだ長床式土器に先行する土器形式が知られていないが、あるいは獅子懸式土器の地域圏に属するかも知れない。碧海台地において長床式土器と伴出する乙類壺形土器の文様が獅子懸式土器のその少しく省略されたものであること(註5)は(第25図参照)、ともかくも獅子懸式土器のその後のなりゆきを物語るものである。

野崎第Ⅰ群土器、第Ⅱ群土器、第Ⅲ群(獅子懸式)土器という順序で、八幡の砂堆地域においては土器型式は変遷した。しかしそれは必ずしも土器型式が第Ⅰ群から第Ⅱ群へ、次いで獅子懸式土器へ

と、年とともにしだいに発展し変貌していったことを意味しない。むしろ第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器、第Ⅲ群土器と獅子懸式土器の間には型式的飛躍がみとめられ、連続ではなく不連続が見られる。その変遷は他地域との深い交渉のなかでおこなわれたもようである。もちろんこの地域での自己発展と考えられるものもないではない。たとえば獅子懸式の壺形土器文様の特徴の一をなす波長の大きな楕圓き波文が、知多半島南端の師崎町ハサマ遺跡出土の野崎第Ⅰ群土器並行型式の土器にすでに見られる(註7)ことをあげたい。

知多半島の弥生式土器文化における獅子懸式土器の位置があまりかになるにしたがつて、新しく疑問が生まれた。獅子懸遺跡とは眼と鼻の距離にある柳ヶ坪遺跡においては、何故に獅子懸式土器でなく外土居式土器が発見せられるのであろうか。わずか四〇〇米の近くに、さえぎる山河もなしに、小さな湿地帯をはさんでむかいあつていとなまれた両集落が、同時代にたがいに型式を異にした土器を使用していたとすると、両集落相互の間にはどのような交通が存したのであろうか、ということである。ふたたび柳ヶ坪遺跡が舞台に登場したのであつた。杉崎章君もおそらくかえりみて思い新たなることであらう。

註

- ① 田中稔編『高蔵貝塚』豊橋市瓜郷遺跡調査会 一九五四年
- ② 杉崎章『愛知県知多郡横須賀町柳ヶ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀中学校、一九五三年
- ③ 久永春男『尾張三河遠江における弥生式土器の諸型式とその

地域圏』日本考古学協会第十六回総会研究発表要旨 一九五五年

- ④ 杉崎章『愛知県知多郡知多町獅子懸遺跡第四地点調査概報』野帳第一号 一九五六年

- ⑤ 碧海郡知立町知立神社附近出土土器および安城市大字覆前字南松原四二番地出土土器(註6)はその典型的な例である。知立神社宮司神山尊愛氏の御好意によつて前者の実測図を挿図にかかげたことは感謝に堪えない。

- ⑥ 齋藤勘吾・石川亨・久永春男『明治村の貝塚と古墳』愛知県碧海郡明治村 一九五三年

- ⑦ 吉田富夫『尾張国知多郡師崎町汁谷の弥生式遺跡』古代文化 一二ノ二 一九四一年

昭和三十一年三月二十八日

日本考古学協会々員

久永春男

あとがき

私たちの町・八幡が町史編纂の事業をおこしてより、すでに二年近くになります。そしていま、その原稿・古代関係の資料集「八幡のむらのおいたち」を刊行することになりました。

この地域の遺跡・遺物については、以前から調査されていたのでありますが、とりわけ町史編纂の仕事がはじめられてから、町史の中でこうした資料をどう扱っていくかについて真剣に考えられてきました。歴史のあけはのが神話や伝説でかかれたものがいけないことはいうまでもないが、遺跡・遺物が個々の断片としてならべられた観光紹介的なとりあげにも反省をしてみました。もちろんそれぞれの土器や石器も、けつしておろそかにしたわけではありませんが、それらの遺物と遺跡の状態・他の遺跡の分布の問題など総合的に統一して考えていってこそ、新しい町史がすすめられると考えるのであります。知多半島という地域にくりひろげられた私たちの祖先の生活は、尾張半野や中央山岳地帯での生活との間に、同じ日本人の生活という点では大きく共通点をもちながらも、一方ではいぢるしい変化をもつております。知多半島の平野形成について大きくスペースをさき、遺跡・遺物についてつねに地形や地質との関連を重視したのも、そうした立場にはかならないのであります。

私たちの仕事は多くの人人の協力和幸運にめぐまれてきました。野崎・獅子懸・下内橋の各遺跡が数千年もの長い間しずかに地下にうもれてきたのが、昭和二十八年の十三号台風に原因する土木工事のためまきに消滅していく最後の時にあたり、あたかも八幡の地域

が町史編纂の仕事をやつていたということ、研究方法にもようやく遺跡・遺物による科学的な研究ということが要求される時代であったことなど、幸運といつてすくすくには余りにめぐまれます条件に感謝するのであります。伝兵衛山から出土した硅化木を提供された花井保氏をはじめ、第二章第一節にしろしたごとく八幡の町が町史編纂事業を計画する前から、新しい遺跡を発見したり出土した遺物を大切に保管していただいた方々にはまずもつて敬意を表したい。とりわけ本書に概要を報告した野崎・獅子懸・下内橋の各遺跡の調査については、地主や耕作者の方々すなわち富田星義・坂野鎮一・早川丈太郎・相江しげ・富田四郎・神谷昇・久野栄蔵・近藤高次郎の各氏に感謝する次第であります。また名古屋大学地理学教室の井関弘太郎氏・日本考古学協会々員の久永春男氏には調査のたびに懇切な指導をたまわり、本書の刊行にあたってはそれぞれ序文・跋文をいただくことができた。厚く感謝をいたしたい。また榊古墳の出土品について教示ねがった東京国立博物館の増田精一氏、地質について教示いただいた名古屋市八幡中学の熊崎憲次氏、あるいは当時の大高小学校教諭であつた芳賀陽氏（現・八幡中学校教諭）や、町史編纂委員長の加藤五茂助氏をはじめ後藤六郎・加古文雄・加藤憲治・土井佐一・伊藤芳彦・花井董・山口喜一の諸氏など各委員には多忙の中を連日の調査に援助していただいたことも忘れることはできない。また東京大学地理学教室の多田文明氏には井関弘太郎氏とともにこの地域を踏査され、砂堆列の検討など地形形成の考察に對し貴重な教示をうけた。さらに九州大学の竹内理三氏（知多町岡田出身）には今後にも期待される研究の推進について新しい領域を示

唆していただいた。ともすればどこおりがちになる私たちの研究もそのたびに勇気づけられてきました。

そのほかにも、私たちが気付かない多くの方々の好意にみちた愛情にはげまされて、仕事がすすめられたことはいうまでもないが、横須賀中学校郷土クラブの生徒諸君がはたしてくれた努力は各道跡における発掘調査の基盤ともなったものであり、その成果は高く評価されなくてはならない。従来郷土史が郷土の特質を強調するあまり、現在の行政区分の中の研究にとじこもっていた例もみられるのにくらべて、八幡と横須賀の地域においては地形の上からのみでなく、二千年の上からも同じ生活領域の単位であつたことを、野崎・獅子懸・柳ヶ坪の各道跡が系統的に発展のあとを裏付けており、横中郷土クラブ諸君はそれを実践してくれたということができよう。

多くの方々の指導と援助にもかかわらず、できあがつたものは最初に期待した姿から、ほど遠いものとなつてしまつた。町史編纂委員長の加藤五茂助氏や副委員長の後藤六郎氏・編纂会書記の井村三朗氏には、ただ発掘調査という面のみではなく若輩にして菲才の私が、知らずしておかしている多くの過誤をつぐなつていただいたりもした。いま本書を刊行するにあたり、多くの反省をいたすことに、各位のあたたい御援助に感謝し、八幡町史の大成に決意を新しくしている次第であります。

昭和三十一年三月三十日

八幡町史編纂委員

杉 崎 章

八幡町史編纂会日誌 — 抜萃 —

昭和二十九年

- 五・一九 八幡町史編纂会役員委嘱状(五・一五付) 発送
 - 五・二五 第一回八幡町史編纂会役員会開催、規約審議、町史編纂委員会は委員長加藤五茂助氏・副委員長富田良材氏を決定
 - 六・八 八幡町史編纂委員会を開き、南山大学人類学民族学研究所主事伊奈森太郎氏より、町史編纂について教示をうける
 - 七・六 八幡町史編纂委員会を開き、近世史料の調査に着手
 - 七・二九 平松武男氏文書をはじめ中島村関係資料の調査のため、愛知学芸大学助教森原章氏の指導をうける
 - 七・三一 八幡町史編纂委員会を開催、調査事項の中間報告
 - 一〇・二四 第二回八幡町民文化展覧会に協賛して、参加出品する
 - 一二・二八 八幡町史編纂委員会を開き、編纂委員を原始古代・中世・近世・教育・芸能文化・産業・金融・新田開発・町政の研究部門に配属決定し、さらに研究を進める
- 昭和三十年
- 一・二七 八幡町史編纂委員会副委員長富田良材氏逝去される
 - 一・二九 八幡町史編纂会役員会を開催、編纂委員全員の協力調査による八幡町史資料第一集「近世庶民資料目録」上梓刊行
 - 二・八 町史編纂委員会を開き、副委員長に後藤六郎氏を互選
 - 二・二〇 名古屋市鶴舞図書館の郷土文化会々員三十余名來幡され、法海寺宝物を拝観、北川幸太郎一座の尾張萬歳を見学する

五・八 かねて指導を得ていた徳川林政史研究所の所三男氏の

來幡を願ひ、町史編纂全般につき教示をうけ、深更まで懇談

八・三一 八幡町史編纂会役員を変更し、委嘱状を発送する。解任者の土井剣一氏(会長)・花井重久氏・内山隆一氏(副会長)・

早川重孝氏・水野甫氏・加藤啓三氏・加古光治氏・齋部正三氏・

山口春夫氏(理事)には感謝状を贈呈する

九・一八 八幡町史編纂会役員会を開き、規約改正並びに懇談

九・二〇より一〇・八まで延十日、夜間を利用して古文書の再調査

一〇・八・九 北獅子懸の土取工事中に、遺跡発見を知り調査実施

一〇・一〇 名古屋大学講師井関弘太郎氏來幡され、秋雨の中を野

崎・獅子懸・下内橋・西水代地域の地質調査をねがう

一二・一八 第一回八幡地区総合展覧会を開き文化財部として協賛

一二・一九 八幡町史編纂会副会長下村健三氏退職される

一二・二三 八幡町史編纂会役員会を開き、野崎遺跡調査の打合せ

一二・二五 八幡町史編纂会理事浜野藤一郎氏退職される

一二・二七・二九 野崎遺跡調査(地文記第一二二号)、調査終了

後に報告会をもつ、講師は日本考古学協会会員久永春男氏

昭和三十一年

- 一・九 東京大学教授多田文男氏が井関弘太郎氏とともに來幡され、この地域の平野地形の形成について指導をいただく
- 二・一七 郷土出身の九州大学教授竹内理三氏(知多町岡田)の來幡をいただき、法海寺を中心とした町史の展開に教示をうく
- 三・二六・二八 西屋敷員塚調査(地文記第一三四号)を開始する

八幡町史編纂会役員（昭和三十一年三月）

顧問 石井次郎（知多町長）

会長 伊藤象三（知多町議会議長）

副会長 尾之内孟夫（知多町教育委員会委員長）

理事 小西富英・加藤金之助・近藤昇吉・永井藤三・久野勝・
神谷時好・柿田友太郎・伊藤慶之助・尾之内高正・竹内

清太郎

参与 平松義一・浜岡佐一郎・伊藤兼義・神谷嘉一郎・早川甚

三

編纂委員 森岡政一・加古文雄・後藤六郎（副委員長）・尾之内

久吉・加藤五茂助（委員長）・堀田鎌吾・菱田英重・小

島善一・鷗部丹藏・杉崎章・山口喜一・花井董・平島泰

山・館康正・加藤照剛・杉原寛幸・竹中正安・鬼頭禪機

・伊藤芳彦・加藤憲治・土井佐一

書記 井村三朗・鬼頭和男

昭和三十一年三月三十一日印刷
昭和三十一年四月十五日発行

（非売品）

町史資料

八幡のむらのおいたち

愛知県知多郡知多町八幡

知多町役場八幡支所内

編集 八幡町史編纂会
発行

愛知県知多郡八幡町
大字義文字北廻り九

印刷所 紙鉄印刷所

電話掛紙四八番

知多市歴史民俗博物館



7900035788

15.51

